



Green Letter

No.47

年1回発行
2025.12

特集

森を想う 森を活かす

FOREST

富士フィルム・グリーンファンド (FGF) とは

集落を囲む森と海のコントラストが美しい七尾市巾島町の集落。能登の人々は、身近な里山里海の資源を巧みに活用し暮らしを営んできた。(小山明子撮影)

公益信託富士フィルム・グリーンファンド (FGF) は富士フィルムホールディングス (旧 富士写真フィルム) 株式会社が創立 50 周年を機に新しい分野での社会還元を志し、自然環境の保全・育成のための基金拠出を決意し、1983 年に設立されたものです。民間企業による、自然保護をテーマとした公益信託としては日本で最初に設立されたもので、この 42 年間に、自然環境の保全・育成に関する活動や研究に対して数多くの助成や支援を行い、成果を上げてきました。

●概要

設立年月日 1983 年 10 月 12 日
委託者 富士フィルム ホールディングス株式会社
受託者 三井住友信託銀行株式会社
受託財産 1,000 百万円

●事業内容

FGF は 4 つの事業を進めています。

- ① 未来のための森づくり
- ② 緑のための支援事業
- ③ 緑とふれあいの活動助成
- ④ 緑の保全と活用の研究助成

*今年度の活動は本誌 22 ページからの FGF 通信にあります。
*現在、本公益信託の事業は、日本国内を対象に行っています。

Fujifilm Green Fund is the very first charitable trust in Japan which was established by a private enterprise for the purpose of nature conservation. For the last 42 years since its establishment, the Fund has been applied toward a number of successful programs for support of various activities and research works concerning nature conservation.

●OUTLINE

Date of establishment : October 12, 1983
Trustor : FUJIFILM Holdings Corporation
Trustee : The Sumitomo Mitsui Trust & Banking Co., Ltd.
Fund : Japanese Yen 1,000,000,000

●ACTIVITIES

- 1. Creating opportunities for exchange between people and green environment
 - 2. Promoting communication between concerned people in support of green environment
 - 3. Supporting activities for conservation of green environment
 - 4. Supporting research works for conserving and fostering green environment
- * Currently, the fund is applied to domestic activities only.

2026年度 活動・研究助成申請予定 応募の締切 5月7日(木)

2026 年度の活動・研究助成の申請は 2026 年 3 月 2 日より受付を開始いたします。応募要項をご希望の方は、一般財団法人自然環境研究センターのウェブページ (<http://www.jwrc.or.jp/>) から当該文書をダウンロードください。ハガキまたはファックスに住所・氏名・電話番号・研究あるいは活動助成の別を明記の上、下記宛てにご請求いただくことも可能です。
〒130-8606 東京都墨田区江東橋三丁目 3 番 7 号 江東橋ビル (一財) 自然環境研究センター内
公益信託富士フィルム・グリーンファンド事務局
TEL. 03-6659-6310 (平日 10:00 ~ 17:00) FAX. 03-6659-6320

2027年1月から助成開始予定 応募の締切5月21日(木)

未来のための森づくり事業 (第6期)

都市近郊における自然とのふれあいを確保することを目的とした「未来のための森づくり事業」を実施している団体に対して複数年(4~5年程度)にわたる助成事業として、第6期の募集を行います。本助成事業は、地域の人々が自らの活動により身近な自然を保全し「未来のための森」として次世代に引き継いでいくことを支援するものです。活動・研究助成と同じく 2026 年 3 月 2 日より受付を開始いたしますので、応募要項をご希望の方は、左記と同様にご請求ください。

編集後記

今回は「森を想う 森を活かす」を特集テーマとしました。森を想う人を増やし、さまざまな形で森を活かすことで恵み豊かな森を再興する、その大切さを伝えたいと思っただけです。中静透さんと長野麻子さんの対談では森の新たな価値をつくり出していくための力強いメッセージをいただきました。

昨年の特集で取り上げた能登半島では震災と豪雨災害によって森林も各所で被害を受けており、森林・林業の再興が大きな課題となっています。その能登で森づくりや森林資源の活用を進めている人々たち取材しました。間伐などで手入れされた森には光が差し込み、災害にも強い「気持ちいい森」を実感しました。輪島・三井の森づくりの現場の一画は、災害で遊び場をなくした子どもたちが自由に遊べる場にもなっていました。能登の素材と技術を活かした家「アテイエ」では木の温もり、人のやさしさが心に響きました。

全国各地で森に関わる活動をされている方々にもご寄稿いただきました。奈良の陽菜の森、徳島の橋本山林、飛騨の広葉樹の森やウッドデザイン活動の現場から大切なメッセージを届けていただきました。

そのひとつ、奈良の陽菜の森を今年5月に訪れました。この森には鳥取大学の家中茂先生がアドバイザーとして関わってこられました。オンラインの打ち合わせでお話を聞き、ぜひ一度お会いしたいと思った方です。しかし、家中先生は3月に急逝され、直接お会いする願いは叶いませんでした。

地域に森を開き、福祉や教育、新しい働き方と森づくりを結びつけている谷夫妻に陽菜の森をご案内いただいた時に「林業から森林業への転換がさまざまな地域課題の解決、そして生物多様性など地球環境課題の解決にもつながっていく」という家中先生の強い思いが伝わってきました。陽菜の森では植生や土が豊かで生物の多様性も高く、収穫も多く、地域の人にも愛着を持ってもらえる「本当にええ山」への挑戦が続いています。

家中先生の想いやめざしたことが多くの人、地域に伝わりますように、そして森がさまざまな形で活用されることで森の新たな価値が生み出されていくよう願ってやみません。(W)

能登島から七尾北湾越しに対岸の穴水町を望む。「能登の里山里海」という名称で世界農業遺産に認定されている能登の森と水田、海の距離はとても近い。



今回の特集では「森を想う 森を活かす」をテーマに掲げ、能登の現場取材し、全国各地で森に関わる活動をされている方々にご寄稿いただき、皆さんと一緒に森の価値を見つめ直していきたいと思えます。

一方、全国の森林に目を向けると、森林は国土の約7割を占め、その恵みに私たちの生活が支えられているもの、身近な存在として「森を想う」人は決して多いとは言えません。そうした中、さまざまな形で「森を活かす」ことにより、恵み豊かな森を再興しようとする動きが広がってきています。



特集 森を想う 森を活かす Forest

4	森を想う 林業から森林業へ 対談 / 中静 透 × 長野麻子 司会 / 渡辺綱男	16	林業をとおした 豊かな森づくり 橋本光治・橋本延子・橋本忠久 鎌田磨人	22	FGF 通信 ・2025年度事業報告 ・未来のための森づくり (鞍馬火祭保存会) ・2025年度わたしの自然観察路 コンクール受賞作品紹介 ・2025年度助成先紹介および 2024年度助成先活動・研究報告 ・FGF 助成一覧
8	能登の森を想う 地域からのメッセージ 編集部取材 / 奈良雄一・田口千重、 砂山亜紀子、山本亮	18	不確かな広葉樹の森で 踊るわたしたち 松本 剛		
14	「本当にええ山」を めざした森づくり 谷 晴子	20	木を活用して社会課題の解決を 目指す「ウッドデザイン」の活動 高橋義則		

表紙写真：橋本幸則撮影
震災の影響を受け、徐々に変わりつつある能登の里山の風景。それでもなお夕日を浴びて、青々とした森や田畑が輝いている。

47号に登場してくださった方々



中静透 (なかしずか とおる)
1956年新潟県生まれ。国立研究開発法人森林研究・整備機構理事長、森林総合研究所所長。森林総合研究所主任研究官、京都大学生態学研究センター教授、総合地球環境学研究所教授、東北大学生命科学研究科教授、総合地球環境学研究所特任教授、プログラムディレクターなどをへて現職。専門は植物生態学、生物多様性科学。



長野麻子 (ながの あさこ)
愛知県生まれ、愛知県立岡崎高校卒、東京大学文学部仏文学科卒、1994年に農林水産省に入省。林野庁木材利用課長時代に森にハマり2022年6月に早期退職。2022年8月に日本の森を盛り上げる株式会社モリアゲ (<https://mori-age.jp>) を起業。森林業コンサルタントとして全国の森をモリアゲ中。



渡辺 綱男 (わたなべ つなお)
1956年東京生まれ。1978年に環境庁に入庁、全国の国立公園や野生生物の保護管理にあたる。釧路湿原の自然再生や知床の世界遺産登録、生物多様性条約COP10の開催、三陸復興国立公園づくりなどに携わり、2012年環境省を退職。現在は自然環境研究センター副理事長や国連大学サステイナビリティ高等研究所客員リサーチフェローを務めている。



奈良雄一 (なら ゆういち)
1977年東京生まれ。1999年横浜国立大学建設学科卒業。2000年渡伊。ヴェネツィアでガラス工房、建築事務所勤務を経てデザイン活動を始める。2006年ヴェネツィア建築大学卒業。2007年能登に移住し能登デザイン室を設立。ローカルな素材や技術を活かし、日々の暮らしを豊かにするデザインを心掛けている。



田口千重 (たぐち ちよ)
石川県七尾市生まれ。大学で建築を専攻、その後英国で庭園設計を学ぶ。イタリアを訪れた際にスローフード運動に出会い共鳴。生まれ育った能登のポテンシャルを感じ、帰国後能登島を拠点とし活動を始める。おばあちゃん達の知恵を吸収しながら島暮らしを実践し、3児の母として子育てを行う。



砂山亜紀子 (すなやま あきこ)
兵庫県出身。結婚を機に石川へ移住。登山をきっかけに森林ボランティアに参加し林業の大切さを知る。金沢林業大学校修了後、もりラバー林業女子会@石川を設立。資源活用と持続可能な森づくりを全国事例から学び、石川の現場での展開を模索中。木材コーディネーター・森林施業プランナー。

発行 公益信託 富士フィルム・グリーンファンダ
受託者 三井住友信託銀行株式会社



山本亮 (やまもと りょう)
東京出身。大学のゼミで訪れた能登の里山の美しさや暮らしの豊かさに惚れ込んで、自分もここで暮らしをしたいと移住を志す。地域おこし協力隊として移住し、里山の暮らしを楽しめる「里山まるごとホテル」を開業する。被災後は仲間ととの復讐ラボを立ち上げ、ボランティア活動による復旧支援や循環型の地域づくりを行う。



谷 晴子 (たに はるこ)
静岡県庁の林業技術職を16年務めた後、奈良県へ移住。静岡では「林業女子会@静岡」の立ち上げに関わる。奈良県では、その経験を活かして、陽菜の森をフィールドとした企業や大学と森を繋ぐ事業を進めている。生物多様性、脱炭素など林業から広がった大きな枠組みにも取り組んでいる。



橋本光治 (はしもと みつじ)・橋本延子 (はしもと のぶこ)・橋本忠久 (はしもと ただひさ)
「橋本山林」は徳島県那賀郡に位置し、5世代に渡り、持ち山の持続可能な環境を大切に、林業を営んできた。大橋慶三郎氏に師事し、安定した高密度の作業道を張り巡らせることで、家族経営という少人数での林業を可能としている。森林施業と生物多様性の高い森林生態系との両立を示す、貴重なモデルである。



鎌田磨人 (かまだ まひと)
徳島大学大学院社会産業理工学研究部、教授(学術博士)。専門は景観生態学、生態系管理工学。1990年3月に広島大学大学院生物圏科学研究科博士後期課程を修了し、4月から徳島県立博物館の植物分野学芸員。1998年4月に徳島大学に転出し、現在に至る。2020～2023年に日本景観生態学会・会長。



松本 剛 (まつもと たけし)
株式会社飛騨の森でクマは踊る代表取締役。株式会社トビムシ取締役。2015年ヒダクマを設立、多様な人と森や木が出会い活かしあう場や機会を整え、コーヒーから建築まで様々なものづくりを行っている。飛騨市広葉樹のまちづくりの各種事業も企画・運営。他地域でも森のテナント貸しや森林バンク制度などの仕組みづくりを行う。



高橋義則 (たかはし よしのり)
一般社団法人日本ウッドデザイン協会常任理事。株式会社ユニバーサルデザイン総合研究所代表取締役社長。ウッドデザイン賞の企画・運営に携わるほか、地域資源や技術・人材を活かした製品、空間の開発、戦略立案などのプロジェクトを手掛ける。

編集制作 一般財団法人 自然環境研究センター
編集人 渡辺綱男 ((一財) 自然環境研究センター 副理事長)
編集協力 森木保恵 長弘瑠生 (富士フィルムホールディングス株式会社)
デザイン 株式会社アートポスト
印刷 株式会社高陽堂印刷

特集

森を想う 森を活かす

FOREST

林業から森林業へ

森の研究と観察を続けてきた中静透さんと、日本の森を活性化させる会社を設立された長野麻子さんのお二人に対談をお願いしました。

森を想う

中静透さん 国立研究開発法人森林研究・整備機構理事長

長野麻子さん 株式会社モリアゲ代表

司会 渡辺綱男 FGF機関誌「グリーンレター」編集長

2025年9月16日 自然環境研究センターにて

森に関わる仕事へ

渡辺 今号の特集は「森を想う、森を活かす」です。全国で森をさまざまな形で活用しながら、めぐみ豊かな森を再興しようとしている活動の紹介をします。このテーマに相応しいお二人、研究者として50年にわたり森林の姿を観察してきた中静透さん、そして日本の森を盛り上げる会社「モリアゲ」を立ち上げた長野麻子さんにいらしていただきました。

長野 テーマの「森」ですが、そもそも森に関心のある人が少ないのが問題です。中静先生が理事長をされている森林総研の研究では東京23区の住民の3人に2人はここ1年間、森に行ったことがないとか。
中静 ドイツでは週に3回は森に行くのが普通だと言いますから、日本は少ないですよ。研究結果では、幼少期に自然に親しんでいた人は、森林への

関心と訪問頻度が高いことがわかりました。

渡辺 お二人は幼少期に自然に親しんでいましたか。

中静 僕は新潟県の越路町(現、長岡市)で育ちました。日本酒「久保田」の酒蔵のある丘の上に中学校があったので、毎日、自転車で酒の香りのする坂道を登っていました。春先に2メートルの雪が溶けて土が見えはじめ、カタクリが一面に芽を出すと浮き浮きしましたね。強烈に覚えているのは、中学1年生の最初の理科の授業です。教室の花瓶に植物が生けてあって、先生が「この木の名前を知っているか」と問われて、「アオキでは？」と答えたと、ここのあたりにアオキはない」と。正解は雪の多い地域に特有なヒメアオキでしたが、このやり取りがずっと心に残っています。その先生が顧問の生物部に入ってから、裏山で毎日植物採集をして過ごし、地元の科学博物館の

植物標本のコンクールで賞をもらったりして、この道で生きていけたらなと思っていた少年時代でした。

長野 わたしは愛知県の安城市の生まれです。平野の田んぼの真ん中に家があって、玄関先でへびやザリガニを飼っていました。夕方、近所の梨畑でセミの幼虫を取ってきてカーテンにそっと置くと真っ白い背中が出てくる。今のように他に娯楽がないこともあるけど、生きものは好きでした。安城は水がないところだったので、水不足に苦しむ人々の救済のため私財を投じて約30キロメートルの用水路開削を計画した都築弥厚という人のことを道徳で習うんですよ。水源地ま



森林総研の理事長室での中静透さん

教わりました。卒業後は森林総研、京都大学の生態学研究センター、総合地球環境学研究所、東北大学で熱帯林や広葉樹の林の管理、生物多様性、温暖化の研究に携わってきました。

僕は同じ場所を長く見るのが好きで、大学4年生から始めた飯綱山(長野県)の観察は45年続けています。大台ヶ原(奈良県・三重県)は1981年から、小川の広葉樹の森(茨城県)は1987年から、白神山地(青森県・秋田県)も1999年からずっとですね。

渡辺 わたしが環境省の生物多様性企画官だったころ、中静さんが環境省にいらして「国際的なグループでは長期的な生態系モニタリングをやっている。日本でもできませんか」とおっしゃった。このご提案がきっかけでモニタリングサイト1000*1が誕生したのです。

長野 モニ000の始まりは中静先生でしたか！わたしは1994年に農林水産省に入って、2018年から3年間、林野庁で勤務しました。森が駄目になったら農業だって水産業だって駄目になってしまふ。そういう当たり前のこ



林野庁時代の長野麻子さん(左)

*1 モニタリングサイト1000(通称モニ1000)は、全国に1000か所以上の調査サイトを設置し、100年以上モニタリングを継続することで、基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続して、日本の自然環境の質的・量的な変化を早期に把握することを目的とする

*2 温室効果ガス(CO2など)の削減量や吸収量を認証し、それを「クレジット」として取引可能な仕組み。森林はCO2を吸収する能力があるため、森林を管理する山主などがその吸収量をクレジットとして認証を受け、売却することで収益を得ることが可能

白神山地世界遺産地域内の、クマゲラの巣があったブナ林。地滑り後に一斉に成立した森林と思われるが、20年間で細い木が減った一方で、林床の低木類は増加した。



とをみんな忘れていると気づき、もっと森から発信しなくてはと思い定めていた4年目に農水本省に戻る内示を受けて長官室で帰りたいと号泣するという(笑)。森への想いが抑えきれなくなると、結局、役所を辞めて森林業コンサルタント「モリアゲ」を立ち上げたんです。

森林業を広める

中静 狭い意味の林業だけではない「森林業」が必要ですよ。

渡辺 林野庁が進めているウッド・チェンジは長野さん発案ですか。

長野 国産材利用の時代が来たと言われて久しいですが、何か足りない。需要側の国産材を選ぶという、その選択が足りないのです。施主の皆さんに鉄やコンクリートからチェンジしてもらおうというウッド・チェンジを林野庁時代に提唱しました。モリアゲでは、企業に自分事として森林に関わってもらう。「社一山運動」に力を入れていきます。森の恩恵を受けてない企業も人でもないから、あなたの利益の一部で森に恩返しをしてくださいという願いを込めて。

渡辺 その呼びかけに伝えてくれた企業はありましたか。

長野 応えてくれる企業もあるので、経営者が変わると断ち切れてしま

いがちで持続性が課題です。自分自身も長野県のカヤの平高原の牧草地跡地でブナ林の再生をしており、今はソフトバンクさんと協働しているのですが、もともとはNPO森のライフスタイル研究所さんが10年やっておられて、その頃から一緒だった伊藤忠建材さんは今も通って植樹を続けています。森の長い歴史のなかで活動主体である私たちは、その途中にちよつと参加するだけ。今どのタイミングなのかの位置づけがわかると自分の役割を感じられると思います。

渡辺 今号の特集テーマを立てるにあたって、以前に講演会で長野さんが「森林業」と言っておられたのが心に残っており、いろんな形で良い森をつくる動きが広がれば良いなと中静さんに相談して誌面に登場いただく方をピックアップしました。

長野 奈良県の大和森林管理協会(本誌14~15P)はカーボンクレジット*2を販売していますね。

代表理事の谷さんたちがすごいのは自分たちでクレジットの認証を取得して、それで得たお金を森に還元しているところ。コンサルに丸投げすると、手元にいくらか残らなくなることもありますから、クレジットは森を守る人たちにちゃんと還元されるのが大事だと思います。

中静 ほんとうにそう思います。

森を想う

林業から森林業へ

長野 飛騨市のヒダクマ(本誌18頁19P)は広葉樹のまちづくりですね。
中静 クライアントさんと1週間ぐらい合宿して、どんどん議論して製品をつくるとか。



長野 飛騨市と株式会社口フトワークとトビムシが、2015年に立ち上げた官民合同会社です。こういう事業は昔だと第三セクターで赤字みたいなイメージがありますが、これは新しい官民連携のカタチ。人口が減って森を管理する人もいなくなるなかで、もう官とか民とか言っている場合じゃないなかでの中間支援組織みたいなものです。

長野 徳島県の橋本山林(本誌16頁17P)は自伐型林業^{*3}を実践していることで有名です。110ヘクタールの森林を管理し、五世代にわたる林業と自然が調和した家族経営のモデルケースとして注目されています。
渡辺 ウッドデザイン協会(本誌20頁21P)は割と新しいですね。

長野 林野庁木材利用課長のときに、ウッドデザイン賞を民営化したんです。森や木材の団体はセクターごと

なんです。この協会はいろんなセクターがごちゃ混ぜになって何かが生まれる場所になったらしいんですよ。

中静 賞を取ったすばらしいデザインを見て「うちも木でやってみよう」となるといいですね。そして川上にお金が落ちるような形にしていけないといけない。誌面に登場するような皆さんの活動が広がっていかないと持続可能な林業にはならないし、生物多様性も守れない。地域に人がいなくなってしまうたらもう駄目なんで、産業として成り立つとかね、いろんな形でお金がまわっていくようにしないといけないですね。

能登の復興

渡辺 これから10月に能登に取材に行き、アテ^{*4}にまつわる方々などの取材をする予定です。

長野 わたしもアテ林業・能登ヒバによる能登の創造的復興サポーターになっていきます。森だけでなく、町も暮らしも一緒につなぎ直すことを、能登で活動する皆さんは目指しておられると思うので応援したいですね。A.T.E.N.O.T.E(アテノート)とい

中静 白神山地も大雨で30年前から手を入れていない昔の林道が崩れてきてしまっ。25年間で3000人弱の人が関わってくださったブナ林のモニタリングができなくなりそうです。どうかにかして続けたいと思っています。
渡辺 100年続けたいところですね。
長野 カヤの平高原のブナ林再生はあと288年かかりますから！先週は長野産のカラマツで子どもたちが絵を描いてペロンチをつくりました。森は地域のものなので、その地域の皆さんがどうしていききたいかを大事にしたい。そして森は人を引き寄せる力があるから、楽しそうな取り組みを増やしていけたらいいな。10年以上自腹で来てくれている人もいて、村の人たちは「なんで？」と言うけれど、こういった活動を求めている方を丁寧に学ばせたいという声が上がって調査をしてきています。そういう若い子たちがいないと続かなくなっちゃう。一番感動したのは、葉っぱを6種類ぐらい見せて「さてブナはどれでしょう?」と聞くと、地元の

*3 森林所有者や小規模な林業者が自ら森林を管理し、伐採や植林を行う持続可能な林業の形態
*4 「能登ヒバ」の別名を持つ。石川県、特に能登地方で広く植栽されており、石川県の県木にも指定されている



森を手入れするため、岡山県西栗倉村でチェンソー特別講習を受けた。撮影：(株)百森

白神山地に分布する様々な樹木の葉を並べ、種名を読み上げて、その樹種の葉をカルタのように取り合う。モニタリング活動でキャンプする夜のゲーム(詩田明史氏撮影)。



う能登ヒバを使用して製作された楽器を通じて、人と自然をつなぐことを目的としたプロジェクトも応援しています。



中静 僕は金沢大学が中心に進めていた里山里海の関連のプロジェクトで能登に行っていました。

渡辺 能登半島地震とそのあとの豪雨災害であちこち森も崩れてしまいました。この森を再生するのは簡単にはいかないようです。



旧岩崎中学校の生徒さんたちがブナの直径を測定する様子。白神山地青池周辺(神林友広氏撮影)

小中学生の7割はわかるんですよ。

長野 さすが。そういうのを繋いでいかなないとですよ。日本は自然の多様性が高いから、木の種類も100ぐらい普通に言えるみたいな世界中でいちばん木に詳しい民族とかになったら素敵だと思うの(笑)。

中静 僕はブナの原生林のモニタリングを2泊3日ぐらいのツアーにしたらと思っています。地元の経済のためにもなりますし。

渡辺 まさに森林業ですよ。

長野 森林業には可能性がたくさんあるけれど、まだそれが見えてないですよ。だからまずその価値を発見して現状認識することが大事。とにかくみんな森に行ってみよう。

中静 やれることもその場所その場所が違うからね。どこでも同じことやって成功するっていうわけじゃないから、難しいところだとは思いますが。

長野 森が違うのは場所に紐づいているから。他の森と情報交換すると、地域の強みが見えてくるんじゃないかなと思っています。

中静 そういう意味では多様性って大切ですよ。

長野 何かこう本能的に楽しい！気持ちいい！というのも大事ですよ。そして森にはそれがあると思う。

中静 そうですね。ただしヒバはもとも崩れたところに生える植物。これからどう人間が管理するか考えていけないといけないけれど、昔の人は材の性質をよく知って工夫して使っていました。今後は広葉樹も含めて能登の森林を再生してもらえたらと思っていますが、僕はポートフォリオでやるしかないと考えています。単層林ですと病気も出ますし、その時代に人気の樹種かどうかにも売上が左右されますし。

長野 能登ヒバはブランドが確立していますから、これを伸ばすの良いと思います。2023年に能登のアテ林業が林業遺産として認定されました。アテという地域資源をどう将来に活かしていくかが課題で、これを機に盛り上げようと思っていた矢先に震災が来てしまった。今後は能登ヒバのさまざまな活用を通じて創造的復興につなげていければいいですね。

森の価値を発見する

渡辺 お二人が関わられている山の様子はいかがですか？

中静 そのポイントを上手に掴んでもらうことがまず大事ですね。

渡辺 最後に日本の森林の目指すべき姿をお願いします。

長野 森は国土面積の7割ですから、森を想う人を日本の人口の7割にしたい。寄付でも、お手入れでも、声援でもいい。自分が森に生かされていることを感じて欲しいです。

中静 森林の生態系サービスや公益機能のことももちよっと考えないとんでもないことになるよっていうことも含めて、森や自然をきちんと考えないとけないと思っています。山に近いところで生活できる人がある程度いないと成り立たない話なので、そういう社会に持っていくためにはどうしたらいいんだろうというのが課題です。でも、ネイチャーポジティブみたいな話がこの数年間で出てきて、企業の人たちもとても関心を持っている。山で働いている人たちも社会が森の価値を見つめ直し始めたことを上手に利用して、山の近くで生活できる仕組みを一緒に進めていけるといいですね。

渡辺 今日はありがとうございました。林業から森林業へと視点を広げていくことで、森の新たな価値をつくり出していこう、という大事なメッセージをいただきました。

能登の森を想う

文・F G F 機関誌「グリーンレター」編集部
写真・橋本幸則

1 dialogue

能登の暮らしをデザインするお二人の言葉

能登デザイン室
奈良雄一さん
田口千重さん

自然素材や地域に伝わる技術、手仕事等を活かした建築の設計やプロダクトデザインを行う「能登デザイン室」の奈良さんは東京、田口さんは石川県七尾市のご出身とのこと。

田口「二人は大学時代の同級生なんです。私が先に能登島で古民家を借りてカフェを始めており、彼はイタリアに7年近くいて建築とプロダクトデザインをやっていたのですが、そのうちに彼が能登島に来ようかなと。」

このお家はほぼアテを使った家で、12年経っているといいますが、清々



お二人の住まいでもあり職場でもあるアテの家

しい香りがしますね。

奈良「一階の材はほぼアテです。アテは水に強い材質なので、水まわりや地面に近いところに使うといい。能

登半島地震被害に関する研究[※]によれば、地震に伴う表層崩壊、地すべり、岩盤崩落による崩壊地総数は5700ヶ所を超え、面積は全体で13平方キロメートルに及ぶとされ、さらに豪雨による崩壊が加わり、森林にも大きな被害が発生しました。森林・林業の再興は大事な課題となっています。昨年の特集「能登らしさを大切にしたい創造的復興」から一年が経ったいま、能登の森づくりや県産材のアテ（能登ヒバ）をはじめ森林資源の活用に関わる方々のお話を聞くために能登を訪れました。

2024年の暮れから震災前と同様に一日2便が飛べるようになった能登空港から最初の取材先の能登デザイン室さんのある能登島までは車で約1時間。能登島に渡るには2つの橋が架かっており、今年の6月にやっと通行できるようになった「ツインブリッジのと」を渡るとそこが能登島です。能登島の北岸に面した集落で、お二人の住まいであり職場でもある「アテの家」を訪ねさせていただきました。

登は湿気が多いので、そういった水気の多いところに使うというのが主な使い方だったようです。ただ加工がしづらいので柱や梁を全部アテで、というのは珍しいと思います。この家を建てるときに、地元産の素材やどんな家をこの土地に建てたらよいかを調べて、いろいろな職人さんと会いました。アテや珪藻土はそのときに知って、取り入れて設計しました。家を建てる時端材が出てしまうので家具を作ったり、さらにチップが出るので蒸留して、エッセンシャルウォーターにしたり。建築からの流れで、プロダクトに活かしているところもあります。」

能登では昔からアテを建材に使ってきたのでしょうか。

奈良「スギよりも金額的に高いこともあって、全部アテを使った家とい

うのは昔から珍しいです。ただ、うちを実際に見て良いなと思ってくださった方からは、アテを使って、と依頼していただけるようになりました。この家は金物を一切使わないで木と木を組み合わせていく伝統構法で建てているんですよ。」

地域にはそういった大工さんの技術が残っているのですか。

奈良「素晴らしい伝統の技術も使わないと途絶えてしまうので、うちを立てるなら伝統構法でと考えていました。その後、能登島で伝統構法の家造りをしたいという方が現れて、最近完成したところです。ヨット



金物を一切使わないで柱を組んで建てる伝統構法

が趣味で、海から眺める能登の自然と集落の家の黒瓦の美しさに魅かれて移住を決められたそうです。その方の家の大黒柱はアテです。大工さんの納屋に眠っていた珠洲アテという品種の太いアテを使っているのですが、とにかくすごく力のある材なので、のちほどご案内しますのでみてください。」

地震の時、この辺りの様子はどうでしたか？

奈良「破損はありませんでした。この家自体もちょっとずれてしまったのですが、逆にそのずれが地震の衝撃を吸収したということもあるかと思っています。」

田口「断水はあったのですが、うち

は井戸水なので、その点は困りませんでしたが。近所の人に井戸を貸すこともできてよかったです。それに電気やガス、灯油のかわりに薪ストーブや薪ボイラーを使っているので大きな問題はなかったですね。」



端材を燃料にする薪ボイラー

今回の大雨で山も各所で崩れていますが、アテの状況はどうでしょうか？

奈良「同様に被害を受けていると思いますね。一番問題なのは林道が崩れていて植林しているところまでたどり着けないことでしょうか。製材所も減っており厳しい状況だと思っています。アテは病気も多くて、林として育てるのが難しいとのことですが、県としては、アテを能登の木としてブランド化しようとしている動きはあるので、認知度はどんどん上がってきていると思います。ただどうやって持続的に生産していくのかというところは、なかなか難しいんじゃないでしょうか。」

能登デザイン室の今後の展開は？

奈良「山も田んぼも畑も作る人がどんどん減っています。ほんとうにここ5年ぐらいて一気にという感じですね。移住してきた当初は車を運転



能登の暮らしをデザインする事務所を立ち上げた同級生のお二人



依頼を受けて設計したアテの家

※ 森本淳子ほか(2024年) 令和6年能登半島地震により崩壊したグリーンインフラの現状と再生にむけた課題と提案, 日本緑化工学会誌 50(2)

能登の山林の今を
発信し続ける
女性の言葉

もりラバー 林業女子会@石川
砂山亜紀子さん

しながらどこを見ても綺麗だな...
という感じだったんですけど、それ
がもう明らかに変わってきています。
地震もありましたが、人々の暮らし
方が変わってきているというか。
今後のことを考えるにしても、個人
の活動というよりは、もっと能登全

震災後の山の様子はどうでしたか？
砂山「昨年1月に震災が起こったの
で、令和6年度の仕事の半分はでき
ませんでした。人の生活圏ではない
のでどうしても林道は後回しになり、
現場に続く道が寸断されていて山に
入れなかったのです。地すべりも起
こり、まるごと川まで流れ込んだ山
もあります。このままというわけに
はいきませんが、山主さんがそこに
また木を植えるというのも現実的で
はないので...今後の課題ですね。」

能登の森にはどんな種類の木が多い
のでしょうか。

砂山「一般的に人工林はスギ、ヒノ
キ、マツが多いのですが、能登に限っ
てはスギとアテが多く、一部ヒノキ
やカラマツを植えています。とはい

砂山さんたちが管理する山につけた道



費もない
(笑)。でも
約90人のメ
ンバーに連
絡してお
り、昨日も
5人で集
まってシカ
のシンポジ
ウムの話で盛り上がりました。美味
しいタケノコをいただくために長く
森林整備を手伝っている山もありま
す。普通に林業以外のお勤めをされ
ている方も多い団体です。」

そして現在の山づくりの会社に入社
されたんですね。

砂山「林業女子会はファンクラブ。
ボランティアは草野球。補欠でもい
いからプロのベンチに入りたい、と
あちこちで言っていたら今の上司と
知り合って、2年ぐらい口説いて入
社させてもらいました。森林管理の
部門に4名、トラックのオペレーター
が3名の7名の木材事業部。山も事
務方の仕事も全部に関わることがで
きて勉強になる場です。この10年間
はわたしの思う林業がここに詰まっ
ていたという感じですよ。」

具体的に山づくりのお仕事とは？

砂山「山主さんから預かった山を効
率的に管理するのが仕事です。面的
に広いほうが一体的に管理できるた
め最終的に山主さんの負担が小さく

体の話になってくるような気がしま
す。地域の景観を守ったり、山の手
入れや集落ごとの田んぼをどうやっ
て維持していくかとか。もつといろ
んな人と協力して、うまく利用した
り、景観を維持するような取り組み
ができればいいなと思っています。」



震災による地すべり跡を見せてもらう



伐採した切り株を愛おしそうに眺める砂山さん

砂山さんが森づくりの仕事をする
ようになった経緯は？

砂山「最初は石川県の緑化推進委員
会が募集している森林ボランティア
をしていました。そのときにボラン
ティアの労働力に頼り続けていては

なるので、周辺の山主さんに声かけ
もしたりします。仕事はまずは道を
つける作業から。山から材を出して
くるために必ず道が必要なのです。
残した木を育てることを目的とした
間伐の立ち木を見極め、安全に考慮
しながら伐採し、ハーベスタという
大型林業機械で枝を払いながら指定
した長さで玉切りした丸太を運搬車
で搬出します。4、5人で作業するの
ですが、それぞれが自分の作業をす
る上で困っていることがないか目を
配るのも私の仕事です。」

最後に今後の抱負をお聞かせくださ
い。

砂山「今日、見ていただいた、気持
ちの良い、光の入る山をいっぱい
くりたいと思っています。気持ちの
良い山は災害に強く、木にとつても
良い環境です。放置されて手遅れに
なる前に、木にとつて少しでも環境
を良くして、育ててくれた人に還元
したいなと
思っています
す。広葉樹の
森が良くて針
葉樹の森はだ
めという言い
方をする方も
いらつしゃる
ようですが、
手入れさえし
ていけば針葉
樹の人工林で

能登の地域全体の動きと奈良さ
ん、田口さんが大事に育んできたデ
ザインの力が上手く結びついていっ
たら良いですね。能登デザイン室が
地元産の自然素材や地域に伝わる
技術、知恵を活かしながら積み重
ました。

ねてきたひとつひとつの活動に心
動かされました。そして能登の森
林資源をさまざまな形で活用して
いくことが恵み豊かな森の再興に
つながっていくよう願っています。
大事なお話をありがとうございます

えスギのほうが多いですね。アテは
スギ林の中に点在しています。」

林業が仕事として成り立たず、持続
可能な山づくりができないのではな
いかと思ったことが、林業に興味を
持つきっかけとなりました。こんな
大事なことをみんなでもっと考えなく
ちゃ!と。

それで39歳のとき、金沢林業大学
校を知って、そこを修了しさえすれ
ば林業に携われるのだと思ひ飛び

も気持ちの良い森になるんです。樹
種ではなく、そこに人の手が入って
いるかです。放置するII(イコール)
自然ではありません。こういう事例
を見ていただきながら、言葉だけで
なく、見て感じてもらいたい。それ
は林業女子会の役目でもあります。」

手入れされた山は、下草があつて
多様な生きものがすめるようになる
ということですね。問伐されて光が

込みました。結局、女性
第一号として卒業しても
女性と一緒に働こうとい
う人もおらず、挫折。確
かに効率を考えれば、力
仕事では足を引く張ると
いう自覚もあり、関わり
方を変えようとはじめた
のが、今やっている林業
女子会です。林業が大事
なことや林業の魅力を伝えることは
できると。」

林業女子会は各県にあるのでし
ょうか？

砂山「全国に26あります。何かをし
なければいけないという決まりもな
い組織で、ゆるくつながっています。
何しろ石川の林業女子会は名簿も会

差し込む森の中で、「気持ち良い森
でしょう!」と話される砂山さんの
笑顔がとても印象的でした。「前の
世代から受け継いで、次の世代へ贈
る林業のやりがい大切にしたい。
針葉樹でも広葉樹でもさまざまな樹
種それぞれの特徴を活かした利用の
あり方を考えていきたい。」という
言葉が心に響きました。
心に残るお話をありがとうございます

森林資源の持続可能な利用のため、皆伐後に植林した
場所での取材

元気な笑顔が印象的な砂山さん



能登の復興に向けた力を繋ぐ人の言葉

一般社団法人のと復耕ラボ
山本 亮さん

昨年、震災が起きたときは能登にいらしたのですか？

山本「1月1日の午前便で能登から東京に帰省しており、親戚と新年会の乾杯をすくぐりに地震が起きました。現地と連絡も取れず、もう何もわからない状況でした。飛行機で帰省していたので、車もなく公共交通も止まっていたので能登に帰る手段がなくなっていました。まずは東京でできること、二次避難の支援チームに参加していました。民間でバスを動かす取り組みを始め、定期便で金沢から珠洲の間を運行して、バスが動かない状況を補いました。このバスに乗れば自分も帰れると気づき、1月15日によく能登に帰れたという感じでした。」

この場所でボランティア活動が始まったのはいつからですか？

山本「1月10日からです。私が戻ってくる前からすでに活動は始まっていました。副代表の尾垣が先に現地で動いて、僕とやりとりしながら避難所の仮設トイレや物資を送るなどの支援活動を行っていました。福井で自伐型林業*を行っている宮田香司

次に向かったのは、のと復耕ラボ。10年前に東京から輪島に移住し里山の暮らしを楽しめる「里山まるごとホテル」を輪島市三井町に開業し、現在はその場所をボランティアの運営拠点として活動する山本亮さんのところに伺いました。ボランティアの拠点となる古民家「茅葺庵」の敷地内には、ウレタン製の簡易住宅「インスタントハウス」が点在しています。そのホイップクリーム型のハウスのひとつでお話を聞きました。



取材風景

さんが作られていました。」

その時点で森の修復・再生の話も出ていましたか？

山本「混乱期だったのでひとまずできることをやっていくという感じでした。基本的に被災者の困っていることを助けようと、宮田さんたちがボランティアを募集し、林業仲間が次々に来てくれました。多い時で1日に10人ほどで3月半ばまでの約2ヶ月間支援してくれました。その後、4月からは一日に50名のボランティ

アを受け入れることを目標に、のべ4500人の方々がここを拠点に活動しました。

僕らは毎晩、お酒を飲みながら囲炉裏端で語り合いますが、そこで聞く宮田さんの森の話がとても良かったです。そのときに思ったのは、震災後にここでどういった暮らしをしたいのかということ。震災の前に戻すだけではなく、身近な森から恵みを得る暮らしをしたいよね、という自分たちの共通認識を深めました。また、森づくりで培ったチェーンソーや重機の操作技術や安全管理が災害現場で力を発揮することも宮田さん達との活動で実感しました。能登に住み続けていく上で自分たちがそうした力を高めていく必要性も感じていました。」

森の恵みを得る暮らしのための活動はどんなことを？

山本「拠点近くの森を整備することからはじめています。もともと自伐型林業に興味があり、宮田さんに教わりながら自分たちでもやってみてきた。自伐型林業のポイントは大規模な作業道を密度高くつくり、ど

家がすぐあるので、災害が起きにくくて管理のしやすい森をつくるのが大切と考えています。水害で家の裏の森が崩れて土砂が入ってきた家で度々土砂の撤去してきたので身をもって感じています。」

家屋の古材を回収する「のと古材レスキュー」プロジェクトについても教えてください。

山本「80件程度のレスキュー依頼がありました。思い出の詰まった家に使われていた貴重な古材の活用は、能登のDNAを引き継ぐものだから、それを繋いでいきたいというのが古材レスキューへの想いです。能登の飲食店や宿の再建、コミュニティスペースづくりに活用されています。」



自伐型林業で道づくりが重要

地震や水害があるたびに相当量の木材の廃棄が起こってしまい、地域の文化とは異なる新建材が使われた家や更地ばかりの地域になってしまふことへの疑問があり、こうした活動が広まってほしいと感じています。」

これからの活動はどのように展開していく予定でしょうか？

山本「循環型の暮らしを自分たちが楽しんで、その楽しさや、そこに接続するための入口をつくっていかたいなと思っています。その想いは10年前に始めた里山まるごとホテルの頃と変わりはなく、今はボランティアワークを通じてこの地域の暮らしに関わるきっかけをつくっていきます。」

暮らしの実践者である80歳代の方々が元気なうちにその知恵を伝えてもらうと同時に、実践で得た学び

茅葺庵の敷地内の簡易ハウスでお話を伺った後、森づくりの現場を案内いただきました。幅2メートルの作業道を小型の重機でつくっている真っ最中でした。光が差し込むスギとアテの森の中で、「地域の人が来訪者が親しむことの出来る恵み豊かな里山の森を取り戻していきたい。それは森の力を活かして防災機能を高めていくことにもなる。そして森づくりを担える人材を増やしていくことは、災害時の地域の危機対応力を高めていくことにもつながる。」と話す山本さんの言葉を多くの人に伝えていきたいと感じました。大事なお話をありがとうございました。

* 4人の方々の言葉から能登への想いがあふれだす取材でした。

この想いが多くの読者に届きますように。



ウレタン製の簡易住宅「インスタントハウス」

自分たちの森の木を製材するために製材機を購入した



道づくりの作業

*自伐型林業とは、森林所有者や地域住民が、自分たちで森林の経営・管理・施業を行う持続可能な林業です。近年では林業の技術を身に付けた人が、高齢者や集落が所有する管理が行き届いていない山などで行う形も出てきている。



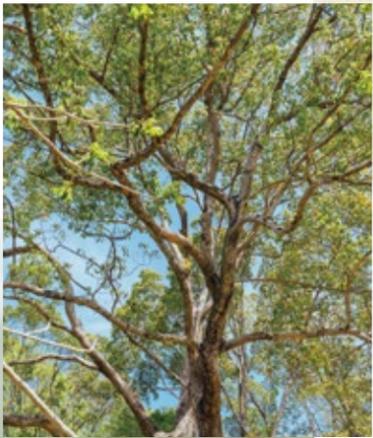
森を想う

「本当にええ山」を めざした森づくり

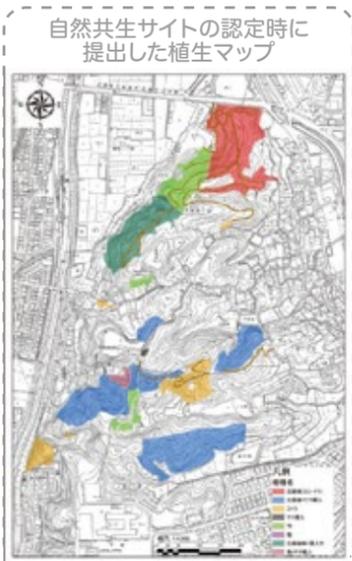
植生や土が豊かで生物の多様性も高く、収穫も多く、
地域の人にも愛着を持ってもらえる「本当にええ山」への挑戦

谷 晴子

一般社団法人大和森林管理協会アドバイザー



上から 放課後デイサービスを提供する団体が活動している森。以前よりずっと明るくなっていく。陽楽の森のシンボルツリーのクスノキ/セブンの森では、子どもたちは葉っぱクイズなどで遊びます。福祉施設を卒業した人たちが展開する薪割事業



春先には筍掘りの体験も提供しています

森をさまざまな人に開く

奈良県北西部にある丘のような小さな森、「陽楽の森」。高度経済成長期のニュータウン開発の中で残された都市林で、その三分の一程度の面積を私たち（一社）大和森林管理協会（以下、大和協）が管理しています。

一般的に森林の価値を作る林業は、「立っている木を伐って木材にして売る」ことが中心です。しかし私たちは、森林にはもっと多様な価値があるのではないかと、それを顕在化させることで「植生や土が豊かで生物の多様性も高く、収穫も多く、地域の人にも愛着を持ってもらえる本当にええ山」につながるのではないかと考えました。そして、陽楽の森を様々な人に開き、価値を生み出すことに挑戦してきました。

その結果、陽楽の森では、3つの福祉関連の団体が活動しています。障がいのある人達が散策したり遊んだりする場の提供や彼らが就労する場の提供など、関わり方はさまざまですが、草刈りや藪の整備、薪づくりなどの作業など、「人が動くことで結果的に森が明るくなる」という循環



2026年春に完成予定のカフェイメージ図

定されました。認定はいただきましたが、生物多様性を継続的に評価・保全するためのモニタリング体制の整備は、まだ発展途上です。今後は近隣大学や企業と連携しながら、森の価値を「見える化」していきたいと考えています。

また、来春にはカフェのオープンを予定しています。建物には、奈良県南部の吉野地域にある自社林から自分たちで伐り出した木を使用。高気密・高断熱構造と太陽光パネルを備えたゼロエネルギービルディング（ZEB）仕様とし、「出所の明確な木材を使ったZEB」として、森林資源を活かした新しい建築モデルを目指しています。

想いや活動が重なり合うプラットフォーム

企業がとの連携も進んでいます。2023年6月には「奈良セブンの森」、2025年8月には「コープの森」として連携協定を締結しました。各企業との連携のあり方は異なりますが、これらの取組を契機に課題となっていた竹林整備のスピードを格段に上げることができました。今では遠くの山並みまで見渡せるようになりました。

さらなる取り組み

最近よく耳にする「ネイチャーボジティブ（自然の再生をめざす考え方）」。「陽楽の森は2023年10月、環境省から「自然共生サイト」に認定されました。認定はいただきましたが、生物多様性を継続的に評価・保全するためのモニタリング体制の整備は、まだ発展途上です。今後は近隣大学や企業と連携しながら、森の価値を「見える化」していきたいと考えています。

小さな子どもがいても働きやすい職場づくり、森の中で癒されながら働くオフグリッド空間（電力を自給自足している状態）の整備、カフェ×福祉といった複業的な働き方の実践など、これからの社会に求められる新しい働き方を形にしていきたいと考えています。ゼブラ事業は、こうした方向性を整理し、地域に必要なことを見極める大きなきっかけとなりました。

*ゼブラ企業とは、2017年に4人のアメリカの女性社会起業家が提唱した概念である。時価総額を重視するユニコーン企業と対比させて、社会課題解決と経済成長の両立を目指す企業を、白黒模様、群れで行動するゼブラ（シマウマ）にたとえて命名された。



林業をとoshした 豊かな森づくり

明治時代から5代にわたって長伐期施業を行い、人を惹きつけ何度でも訪れたくなると言われる橋本山林の森づくり

橋本光治・橋本延子・橋本忠久 橋本林業
鎌田磨人 徳島大学大学院社会産業理工学研究部

伐倒後、搬出に向けての枝払い © 滝川景伍

現在の橋本林業

橋本光治は、妻の延子、息子の忠久とともに、徳島県那賀郡那賀町白ケ谷の海拔240〜820mの急傾斜地にある112haの林地に300m/ha高密度作業路網を整備し、長伐期択伐施業で林業を営んできている。林冠層のスギ、ヒノキの林齢は

高齢木だと125年程度で、林分構成は天然林2割、人工林8割（うち9割がスギ、1割がヒノキ）である。一部、業者による皆伐・植林が行われた林分が存在するが、光治が林業を始めた45年ほど前からは皆伐は行なっておらず、択伐施業によって森づくりを行ってきた。

豊かな植生

鎌田の研究室で実施した植生調査では、橋本林業地内に92科254種の植物（常緑高木35種、常緑低木16種、落葉高木43種、落葉低木33種、草本56種、ツル植物29種、シダ42種）が生育し、林内にはモミシキミ型、アカガシ・ウラジロガシ型、

立をめぐす。美しい森づくりとは、経済性が高く、同時に公益性も高い森をつくるということだ。

こうした森づくりを行うために、地形には細心の注意を払ってきた。尾根「破砕帯」は乾燥、風、崩壊を招きやすく、

木材生産を行ううえで特にリスクに関わる重要な地形だ。森づくりの際には、これらの害を防がなければならない。また、尾根は木の成長が悪く、尾根でも作業道を作りにくい場所では取り出しにくい、すなわち搬出条件が悪い。このようなリスクの高い地形、木材生産に適さない地形では、自然植生を活かして混交林として育林することを選択してきた。斜面方位も重要な地形要因だ。南向き斜面は台風の暴風が来るので、リスクの高い斜面となる。北向きは影になるために、木が光を求めて

スーッと真っ直ぐに伸びるので、木材生産に適している。

斜面上部、下部の違いも重要だ。乾燥する斜面上部は木材生産にあまり適していないので、上層の雑木等も残しつつ木を太らせていくようにしている。斜面下部は木材生産に適しているので、かつて皆伐されたこともあり、比較的

コジイ型、ケヤキ・イロハモミジ型といった自然性の高い植生型や、モチツツジ・スズタケ型、ホオノキ・シロダモ型、コナラ・アラカシ型といった二次林要素の植生型が、地形に対応して保持されていることが確認された。この結果は、土地が持つ自然回復力を超えない範囲で林業が営まれてきていることを示している。最近の調査では、徳島県版レッドリスト*に掲載されている植物種のうち、18種（IA類・3種、II類・11種、準絶・4種）の生育が確認されている。生物多様性の高いこの人工林は、OECM（自然共生サイト）に認定され、Hashimoto Family Forestの名称で世界のデータベースに登録された。

高い理念

橋本林業での森づくりの理念は次のようなものだ。「一利を興すより一害を取り除く（妨げとなるものを取り除く）」、「調和を図る」、「変わらぬものを求めて流行は追わない」、「良いものは守り改善すべきものにする」、「仕方ではなく仕組みを変える」、「自然に学び自然の力を借りる（自然は知恵の宝庫）」。そして、「一つの山を作ることによって、いかに多くの機能を発揮させるか」、「経済性・木材生産と公益性・社会性の両

単純なスギの一斉林となっている。そういう林分では、林内に生育しているシイ、カシ、モミ等はスギの成長の邪魔にならない限りは、なるべく残しながら施業している。こうした理念・考え方のもとで森づくりを行ってきたからこそ、生物多様性に富んだ森ができあがっている。この森は高い洪水低減機能を発揮させていることも、研究によって明らかにされている。

日本各地の視察者が学ぶ森づくり

近年、橋本林業地には多くの視察者が訪れ、森のようすや森づくりのあり方について学んでくれている。また、一般の方に向けて「森に聴き、森に学ぶ―橋本林業ツアー」を開催している。このツアーには日本各地から参加してくれている。こうしたサービスが提供できるのも、橋本林業が掲げる理念のもとで、経済性が高く同時に公益性も高い美しい森をつくってきたからに他ならない。森づくりで大切なのは、自然と対峙しながら、どのような森にするかを思い描くこと、そして、そのために作業道づくりを始めとする施業・管理をどのように行っていくのか、自然に問いかけながら行っていくことだ。



定期的に行っている林内見回り © 稲垣徳文

橋本山林 © 稲垣徳文



橋本山林ツアーの一場面 © 滝川景伍

不確かな 広葉樹の森 で踊る わたしたち

松本剛

株式会社飛驒の森でクマは踊る代表取締役

飛驒の広葉樹と木工加工技術とを
アイデアで結びつける企業
「ヒダクマ」。

設立から10年が経ったいま、
ますます広がる日本の森の可能性



森の表情を閉じ込めたマテリアル「Forest Bank」



森を 想う

築するために、2015年に飛驒市、
ロフトワーク、トビムシの官民共同
出資で立ち上げた会社がヒダクマで
す。

偶然のものづくり

人が植えて育てた人工林と違い、
天然の広葉樹の森からどんな木が出
てくるのかは不確かです。それを使



森の入り口に建てる広葉樹建築

おうとすると、レシピに沿ってスー
パーから食材を買ってくるような計
画的なものづくりではなく、いまあ
る素材と対話しながらその特徴を活
かす偶然性をはらんだものづくりを
しなければなりません。

そのため場として、ヒダクマは

町中の古民家を改装した滞在型もの
づくりカフェ「FabCafe Hida」を
つくりました。建築家やデザイナー
をはじめとした様々な人を招き、森
からのものづくりを巡るツアーを実施
します。規格化・効率化できずに流
通からこぼれ落ちてしまっていた森
の素材に着目して、様々な視点やア
イデアや技術とかけあわせます。

例えば、多樹種の小径木は、それ
ぞれの木の個性を活かし適材適所で
接ぎ合わせたり、製材のできない曲
がった木は、3Dデータ化して原木
のまま設計・ARデバイスを用いた
加工を行ったりして、様々なオリジ
ナル家具や什器、プロダクトを開発
しています。2022年に開設した



上: FabCafe Hida
下: AR 技術を活用したチェンソー加工



自社の「森の端オフィス」では、家
具用材の規格の板を組み合わせて構
造にした広葉樹建築も実現しまし
た。

わたしたちの連帯

ヒダクマ設立の2年後、「飛驒市
広葉樹のまちづくり」がはじまりま
した。ヒダクマだけではなく地域の
みんなで広葉樹を活用していこうと
いう機運が高まったためです。ま
ずは、森や木に関わる事業者が集
まって「円卓会議」を開催。森のこ
とは会議室の中ではなく森の中で
話そう！と、伐採地や土場で「現
地検討会」をするようになります。
2020年には実行組織として、行
政、研究機関、森林組合、製材所、
家具メーカー等で「広葉樹活用推進
コンソーシアム」を設立。その後も、
広葉樹天然林施業のガイドライン作
成、短期木材乾燥技術の確立、新た
な製材所の稼働などの取り組みが行
われてきました。その結果、広葉樹
の用材率は5%から20%程度になっ
ています。

また、次の世代につなげていくた
めの取り組みとして、森と木のイン
ターンシップツアー「森のバトン」
や、広葉樹の施業や製材乾燥の実践
知を伝える「広葉樹のまちづくり学
校」なども行っています。



小径木で大きな空間をつくる。
飛驒市役所応接室



Hidakuma



森と人をつなげる多様なヒダクマメンバー

わたしたちと広葉樹の 森のちぐはぐな関係

わたしたち、株式会社飛驒の森で
クマは踊る（通称・ヒダクマ）が拠
点にしている岐阜県飛驒市は、面積
の約9割が森林、その内の約7割が
広葉樹の森です。豊富な森林資源が
あることから、1300年の歴史があ
る「飛驒の匠」と呼ばれる大工技
術を育み、また、ここ100年では
家具産業が発展した地域です。

急峻な地形と積雪の多い飛驒の天
然の森に生える広葉樹は、細い木（小
径木）や曲がり木が多くて歩留まり
が悪く、樹種が多様で安定供給でき
ないため、産業化された現代のもの
づくりでは扱いづらく、約95%が
チップになり、建築や家具に使われ
る用材はわずか5%程度です。チッ
プになることが悪いわけではありま
せんが、飛驒市内にはチッ
プ工場やそれを使う産業
がありません。目の前に
ある広葉樹は安価で地域
の外に流出して、一方で
家具をつくる人たちは海
の向こうから来た広葉樹
を材料に「飛驒の家具」
をつくっています。

そこで、地域の資源と
ものづくりを結び直して、
身近な森との関係を再構
造しようとしています。

あそこでクマが 踊っているよ

社名をつけた時には知らなかった
のですが、ドイツには「あそこでク
マが踊っているよ」ということわざ
があります。「あそこはにぎわって
いる魅力的な場所だよ！」という意
味だそうです。

取り組みが知られてくると、いろ
いろな人がいるような期待をもって
飛驒の森に来てくれるようになりま
した。コーヒー焙煎士、クマの研究
者、野糞をする人…。立場によつて
森の魅力はそれぞれ。関わる人が増
えれば森の価値は増えていきます。
これまでチップにするしかなかった
細くて曲がった木をカフェテーブル
の脚にする建築家がいれば、棍棒に
して飛ばす人もいるし、フラダンス
の楽器にして踊る人もいます。

日本の森の半分は不確かな、だか
らこそたくさん可能性が眠る広葉
樹の森。飛驒の森のようにあなたの
身近な森も、いろいろな人が集まる
魅力的な場所になることを願ってい
ます。

木を活用して社会課題
の解決を目指す
「ウッドデザイン」
の活動

国産材の利活用を促進し、
持続可能な社会の実現に向けた取り組みを行う
日本ウッドデザイン協会の活動紹介

高橋義則 一般社団法人日本ウッドデザイン協会常任理事



ウッドデザイン賞ロゴ

国産材の利活用と健全な
森林の保全のための
プラットフォーム

日本では国土の約3分の2を森林が占めており、約4割が戦後、人の手で植えられた人工林で本格的な利用期を迎えている。現在、国産材は十分な活用のもとにあるとは言えず、伐採されずに長期間そのままになった森林が増加しており、森林吸収量は森林の高齢化の影響で減少傾向が続く。木材を使うことは、「伐って、使って、植えて、育てる」という森林サイクルの一翼を担うものがあり、CO₂吸収や国土を災害から



ウッドデザイン賞表彰式

守るといつた森林の持つ多面的機能の発揮のためにも重要なのである。

こうした問題意識のもと、森林・林業、木材

加工・流通、プロダクトや建築・住宅、金融やメディアまで幅広い業種・業態の企業、関連団体、自治体が集い、共通のプラットフォームをつくり顕彰事業や研究・活動を実施している

団体が「一般社団法人日本ウッドデザイン協会」である。

木を使って社会課題を
解決する優れた作品を顕彰

主軸となる事業が、木を活かして、新たな時代の価値をデザインする優れた作品を顕彰する「ウッドデザイン賞」(https://www.wooddesign.jp/)の企画・運営である。建築・空間やプロダクト、活動や仕組み、研究等を募集・審査・表彰し、2025年で11回目の開催を迎え、延べ2500点以上が受賞した。木を活かして機能性・利便性

を高めている「ライフスタイルデザイン部門」、快適性を高め心身のリラックスやコミュニケーションの促進等を促す「ハートフルデザイン部門」、持続可能な森林管理、地域経済の活性化に寄与する「ソーシャルデザイン部門」の3つの部門で構成されている。毎年、素晴らしい作品が受賞しているが、2024年の最優秀賞(国土交通大臣賞)には能登半島地震の被災地に建設した、恒久利用を前提とした木造仮設住宅「DLT恒久仮設木造住宅」が選ばれているなど、時代に即した社会課題解決へ木材を活用した取組が見られている。受賞作品はウッドデザイン賞



DLT 恒久仮設木造住宅

作品データベース (https://www.wooddesign.jp/db/) を参照。

科学的根拠に基づいた
最適な木材利用の推進

「調査・研究部会」では、木材の積極的な利用を促す技術や研究、知見を収集・分析し、共有することで、木材利用の一層の促進を目指す様々な活動を実施している。同部会の成果のひとつが、「WOOD DESIGN LIBRARY: 木や木材に関する調

査・研究が集まるデータベース」(https://www.jwda.or.jp/wood-design-lib/) の構築である。

近年では木材の持つリラックス効果や生産性向上に寄与する効果のエビデンスも揃いつつあり、利用者にとっての木材利用のメリットも明らかになってきた。収録されている各種のエビデンスは、施主や施設オーナーにおいては住み手や利用者の具体的なメリットを、設計・デザインや営業に携わる人にとっては木造・木質化を提案するための説得材料となる。

異業種交流を通じた
木材利用市場の活性化

現在、日本ウッドデザイン協会の会員数は企業、関連団体、自治体を含め193(2025年10月末時点)。「ビジネスマッチング部会」は異業種の会員間のビジネスマッチングを目的に、ウッドデザイン受賞作品や企業の視察ツアー、自社の持つ製品、技術、サービスなどをプレゼンテーションできる交流会等を実施している。多様な協会活動のなかでも特に多くの会員に参加いただいており、活発な意見交換が行われている。マッチングを通じて、木材の地産地消や需要の多い都市部への木



ビジネスマッチング。受賞作品や会員企業の製造現場の視察ツアーを全国規模で展開している

ベル)の管理団体として認定を受け、同年12月より運用を開始した。製品・空間・建築物などが、木材の適切な活用を通じて、カーボンニュートラルの実現や森林の循環利用に貢献していることを可視化し、広く周知するために作られたものである。現在、木材を活用したオフィス、商業施設、公共施設などの建築物や空間、木材を使った家具など製品分野でもラベルが使われ始めている。

ウッドデザインの活動には木材の供給側だけではなく、需要側の参画が欠かせない。本稿をお読みいただき本活動へ関心を持たれた様々な業種・業態の皆様とも是非、一緒に活動を進めたいと考えている。



木や木材に関する調査・研究が集まるデータベース WOOD DESIGN LIBRARY



ジャパンウッドラベル・ウッドカーボンラベル

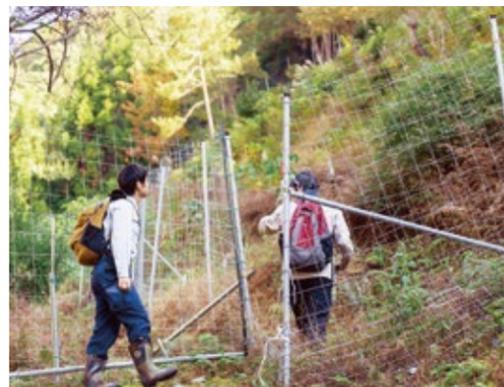


アカマツ林再生のための具体的な活動として、「鞍馬の里山づくりマスタープラン」を策定し、京都大学の協力のもと、里山モニタリング、植樹や防鹿柵の設置、さく葉標本の作成などを行った。この中でも、特に効果があったのは防鹿柵の設置だ。シカによる嗜好性植



『鞍馬の里山ガイドブック』

き付きや生育障害を防ぐため、人為的管理による調整伐や剪定が継続的に必要であることも明らかになった。また、伝統文化を守り受け継ぐ取り組みとして、伝統文化（食文化、信仰、年中行事など）の調査、地元小学生を対象とした自然観察会や松明づくり、冊子『鞍馬の里山ガイドブック』の発行、映像作成や、京都大学の学生を対象にした学外授業、左京区役所や市民組織、企業などと連携した「火祭」でのボランティア活動も行われてきた。こうした取り組みには、海外からの留学生も参加してきた。



防鹿柵

生物の多様性を保全することは、文化の多様性を守ること

物の採食圧をほぼ排除し、群落の多様性とバイオマスを高めることが確認された。防鹿柵内に植栽した柴の資材となる樹種の苗木も順調に育っている。一方で、防鹿柵内ではつる性植物が広範に拡大しており、巻き付きや生育障害を防ぐため、人為的管理による調整伐や剪定が継続的に必要であることも明らかになった。

こうした取り組みの積み重ねこそが、地域文化を支える人・社会・自然のつながりを確かなものにしていくといえよう。

保全が急がれるアカマツ林

鞍馬の里山は、急峻な地形に広葉樹やアカマツの二次林とスギやヒノキの人工林がモザイク状に分布しており、その大部分は私有林となっている。1960年代以降、松枯れによりアカマツ林は激減し、薪炭や用材としての利用がほとんど消失する中で植生の変化や人工林化が進んで

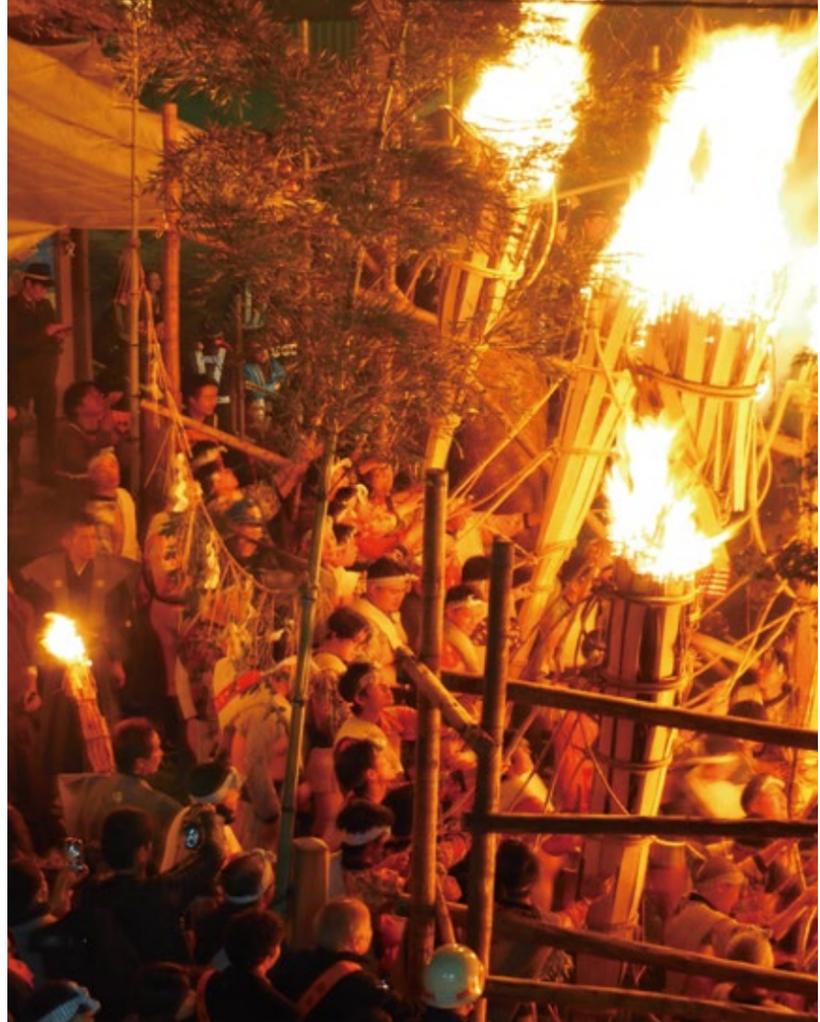
いる。松明の資材は手に入れることが少しずつ困難になり、近年では、シカの食害により、見つけるのも難しくなってきた。「火祭」で使うアカマツや柴などを量的、質的にどれだけ確保できるかは今後においても大きな課題となる。古来より受け継がれてきた鞍馬の「火祭」、京都の食文化を支える持続的な自然資源利用を可能にするために、アカマツ林の再生の取り組みが始まった。



鞍馬火祭保存会会長の三宅徳彦氏（中央）、京都大学の深町加津枝氏（右）と学生たち

京都市周辺の里山は、自然資源を都市部に供給する場として京都の文化的景観や伝統文化の形成に深く関わってきた。京都盆地の北に位置する鞍馬でも、伝統文化である「鞍馬の火祭」が、鞍馬の里の豊かな自然に支えられ、数百年の時を経て受け継がれてきた。「火祭」では形態や大きさが異なる多数の松明が準備されるが、これらの松明に使われる資

材のほとんどは、鞍馬周辺の山林で手に入れる。松明に欠かせないアカマツの心材や、柴の材料となるコバノミツやツツラフジ、柴を固定する木羽や心棒となるスギなどの自然資源を、鞍馬火祭保存会が中心となって様々な機関、地域と連携しながら毎年調達しており、これらを加工する技術も引き継がれてきた。



2025年の鞍馬の火祭

自主的な事業

① 未来のための森づくり

鞍馬の伝統文化と生物多様性を支える里山づくり事業

文・鞍馬火祭保存会

2025年度、公益信託富士フィルム・グリーンファンド（以下、「FGF」とする）は、次の4つの事業を展開いたしました。これからも自然環境の保全に役立つ幅広い事業を各方面のご協力をいただきながら進めていく所存です。一層のご支援をお願いいたします。

■ 自主的な事業

① 未来のための森づくり

都市近郊の緑地を活動対象として選び、自然とふれあうことのできる森づくりを目指した活動に長期的な視点で助成しています。第5期「鞍馬火祭保存会」の5年目（助成最終年）の活動紹介は左ページを参照ください。第6期の助成公募も始まる予定ですので、奮ってご応募ください。

② 緑のための支援事業

より多くの人々にFGFへの理解を深めていただくために、写真

■ 助成事業

③ 緑とふれあいの活動助成

1年間、もしくは2年間の身近な自然とのふれあい活動や自然環境保全のための調査研究に対する助成です。毎年10件前後の助成を実施しています。

④ 緑の保全と活用の研究助成

展やシンポジウムなど、さまざまな活動をしてきました。「自然観察路コンクール」は1984年から実施しています。24、25ページに詳しい内容を掲載しています。

助成事業

③ 緑とふれあいの活動助成

④ 緑の保全と活用の研究助成

第42回を迎えた2025年度のFGF助成は、3月から公募を開始し、5月7日（水）に募集を締め切りました。応募件数は、活動助成に40件、研究助成に49件、合計89件となりました。運営委員会での審査の結果、本年度は活動助成9件、研究助成4件の計13件が助成対象に決定されました。2025年度の助成先の紹介は26、27ページに掲載しています。

今回、助成に選ばれた方々、惜しくも選ばれなかった方々に、この場をお借りして御礼を申し上げます。来年度も自然環境の保全のために活躍している多くの方々からのご応募をお待ちしています。

● 活動助成応募内訳

森林を場とした活動	17件
里山を場とした活動	12件
田畑・農村環境を場とした活動	3件
河川・海域・池・湖沼を場とした活動	5件
その他	3件

● 研究助成応募内訳

動植物（地域生態系）の基礎的な調査・研究	39件
緑地の効用・保全に関する研究	4件
その他	6件

審査員紹介



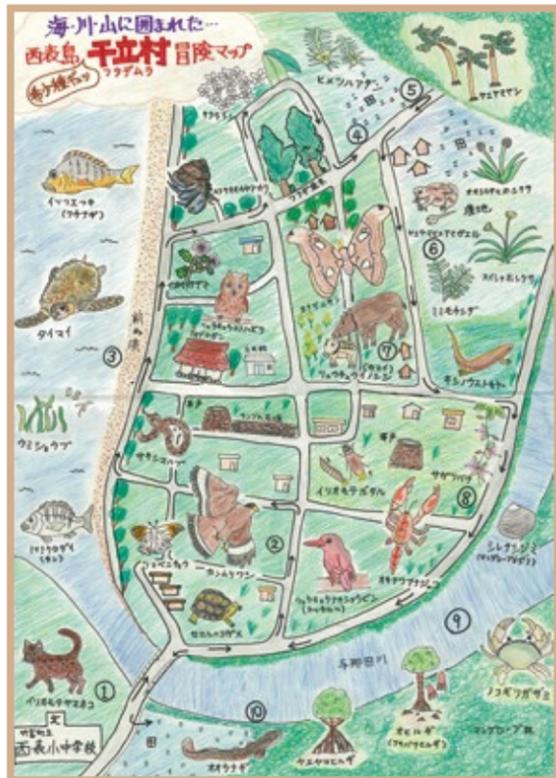
左手前から小林光氏（公益信託富士フィルム・グリーンファンド運営委員長）、森木保恵氏（富士フィルムホールディングス）、稲垣歩氏（三井住友信託銀行）、瀬尾隆史氏（日本環境教育フォーラム）、執行昭彦氏（日本空間デザイン協会）、伊東里佳氏（環境省）*右奥はオブザーバーの長弘瑠生氏（富士フィルムホールディングス）

団体の部

海・川・山に囲まれた西表島（希少種ギョツ） 干立村冒険マップ

西表小中学校全児童生徒（竹富町立西表小中学校 21 名）沖縄県

西表島の干立集落は、海、山、川に囲まれた自然と人が共存する小さな集落です。この冒険マップは、干立集落周辺の自然環境や文化遺産なども描き入れながら、訪れる人々に新たな発見と感動を届けることができれば…との思いで作成しました。希少な野生動植物の観察スポットを中心に作成し、八重山の原風景が色濃く残る地域で伝統文化や歴史に触れられる史跡や集落の風景も訪れた人を楽しんでもらえればと思います。また、四季折々の風景も楽しみ、訪れた観光客にも心に残る旅の思い出を作るためのマップとなれば嬉しいです。近年、西表島を訪れる観光客が増え、レンタカーと野生生物の衝突事故（ロードキル）などが多発しています。島の人々が保全活動に取り組むなか、訪れる観光客にも自然と人が織りなす西表島の暮らしや、ルールを守って過ごしてもらい、野生生物に気をつけながら存分に島の自然を体験してもらいたいと思いこの冒険マップを作成しました。



審査員は事前に送付された資料を精査した上で、壁いっぱい貼られた実物の絵地図を見ながら審査を行います。今年は学校単位の応募は少なくなりましたが、個人による応募が多く力作が揃いました。「ほんとうに自然が大好きな感じが出ていますね」「ルートづくりかたが面白いね」「何しろ絵の完成度が高いです」「絵が個性的」「高低差が絵から感じられます」「中学生の部は特に充実していますね」「作文と絵の内容が重ならないように考えられています」「この種はこの地域にいるかな？」「自分で取材もしており積極的だね」「今年も甲乙つけがたい」と、ひとつひとつ丁寧な審査となりました。



審査風景

高校生の部

花見川周辺の観察路

朝岡 麗（角川ドワンゴ学園 S 高等学校 2 年生）千葉県

花見川は、印旛沼の洪水を防ぐための放水路として江戸時代からの工事を経て、昭和四十四年に完成しました。そこから、周辺に大規模住宅団体がたくさんできました。

歴史も古く、貝塚遺跡などがあり、近くにはオオガハスという二千年以上前の古代のハスの種子が出た場所もあります。

昔は団地の周りに、雑木林や田んぼ、畑が広がっていたのですが、開発が行われたり、田畑を手放す人が増えたので、カブトムシやクワガタ、オニヤンマを見かけることが少なくなりました。

調査をする中で、その土地の歴史や環境の変化、身近な生物について知ることができました。色々な生物を調べたことで、今までに気に留めていなかった植物や虫にも興味を沸きいつも歩いていた道も楽しく感じられます。

みなさんも身近な生物に目を向けてみてください。いろいろな発見があると思います。



自主的な事業

② 緑のための支援事業



中学生の部

トビと巡る 放課後野鳥観察路

廣瀬圭吾（伊勢崎市立境西中学校 2 年生）群馬県

僕は、観察路を選ぶとき、迷わずにこの道にしました。この 1.5 km の道では、空、山、川、町の四つの環境が観察できます。僕は普段、放課後にカメラを持ってこの道を散歩します。すると、小さな季節の変わり目や、必死に生活をしている野鳥たちが目に入ります。いつもの道から外れてみても、新たな発見があります。観察路のなかにはもっと珍しい野鳥もいますが、たくさんの人に魅力を知ってほしいという思いで、気にしなければ見つからないけれど意識してみると意外と身近にいる、面白味がある野鳥を選びました。ほかにも、野鳥だけでなく、ゲンジボタルやカブトムシやシカなどがみられることもあります。そんな自然豊かな僕の地域にも自然を壊す外来生物がいます。特に最近桜の木でクビアカツヤカミキリを見る機会が多くなったと感じ、残念です。そこで自分で市に報告し、できることをやりました。自分も地域の一員として自然を守れるようにしたいです。



2025 年度

第 42 回 わたしの自然観察路コンクール

2025 年度も全国の小・中・高校生を対象に、身近な自然観察路を絵地図と解説文で紹介してもらうことによって、次代を担う子どもたちの自然に関する意識の高揚を図ることを目的に実施しました。

第 42 回になる 2025 年度は 4 部門で合計 263 件の応募があり、環境大臣賞の 4 件を含め、計 31 件の入選作品を表彰しました。

ここでは環境大臣賞を受賞した各 4 部門の 4 作品（絵地図と作文の一部）をご紹介します。

小学生の部

春のヌツク妖精マップ

久保咲楽（帯広市立大正小学校 6 年生）北海道

北海道の南東部に位置する帯広市。その中心部から車で三十分程南下した大正地区に、ヌツクの森はあります。

ヌツクの森の中心には、小さな清流ヌツク川が流れ、エゾリスをはじめとする小動物や鳥たちなど様々な種類の生き物が生息しています。私はヌツクの森の近くに住んでいます。母や兄と一緒に小さな頃からよくヌツクの森に遊びに行っていました。

私が特に好きなのが、スプリング・エフェメラル（春の妖精たち）と呼ばれる花々が咲く雪解け間もない季節の風景です。中でも、オオバナノエンレンソウやニリンソウの真っ白な花が雪のように森を埋めつくす光景は、小鳥達のさえずりも相まって息をのむような美しさです。

春のヌツクの散策路と、隣接する大正公園で出会える春の妖精たちの様子をまとめました。



詳細は、「わたしの自然観察路コンクール」の公式サイトをご覧ください。

<https://kansatsuro.jeef.or.jp/>



2025年度の助成先 13 件をご紹介します。

■ 緑とふれあいの活動助成

絶滅危惧種とその生息環境再生および次世代向け体験型自然科学教育事業

NPO 法人ビオトープ・イタンキ in 室蘭 北海道

失われた湿地を「獲物のあるビオトープ」として復元。子どもたちが自由に動植物の採取をしながら生きものとふれ合える場として開放し、自然体験学習会を実施している。エゾホトケドジョウなどの在来希少種の飼育・繁殖と、生育環境の整備にも取り組み、恒久的なビオトープの維持を目指す。



室蘭市立八丁平小学校 3 年生による自然体験学習

■ 緑とふれあいの活動助成

八ヶ岳南麓のフクロウ生育環境の保全

八ヶ岳自然クラブ・フクロウグループ 山梨県

八ヶ岳自然クラブは八ヶ岳南麓地域の自然環境の保全に貢献することを目的とする団体。フクロウグループでは巣箱をかけてフクロウの子育てを支える活動を行っており、本助成を受けて古くなった巣箱を更新する予定。「麻布大学のいのちの博物館」とも連携して、営巣状況のデータ解析や保護活動の研修会・講演会も実施する。



巣箱の底板を外して中の古い巣材を取り出す

■ 緑とふれあいの活動助成

森の恵みを感じ、植樹し、水源林の効用を身近に学ぶ、子供達等へのトータル森林体験教育

特定非営利活動法人百年の森づくりの会 埼玉県

荒川流域の植林活動を通じ、森林の持つ多面的機能を学ぶと同時に、山村の人々と共に健全な森づくりを推進している。百年後まで水源林を守るために、子どもたちが自ら植林する体験会を実施し、森の豊かさや恵みを感じる機会を提供する。



植樹したヤマツツジの前で (長瀬町宝登山)

■ 緑とふれあいの活動助成

ふくしま浜街道トレイル利用促進のための地域資源、歩行データの調査・研究

特定非営利活動法人ふくしま浜街道トレイルアソシエーション 福島県

福島県浜通りの沿岸部をつなぐロングトレイル「ふくしま浜街道トレイル」について、周辺施設や関係自治体と連携して、持続的な利活用の促進を行っている。マップブックやガイドブックを作成し、歩くために必要な情報と地域の魅力を発信することで、福島県自然や文化とふれあう機会を創出し、地域活性化に繋げる。



ハイカートークイベントの様子

■ 緑とふれあいの活動助成

子ども森林ボランティア養成講座「もりメイトキッズ」

NPO 法人もりメイト倶楽部 Hiroshima 広島県

広島県大竹市で、森林の整備や自然観察会など様々な体験を通じて環境問題に当事者意識を持てる人材づくりを行うことを目的に活動する。月1回の活動のほか、「こども森林ボランティア養成講座」を各季節に1回、年4回シリーズで開催しており、今年度のテーマは『日本むかしばなしを体験してみよう』。



ももたろうのお爺さんの「柴刈り」を体現した活動

■ 緑とふれあいの活動助成

市民連携による「生きもの版 住民台帳」のデータベース作成と市民協働型調査の展開

NPO 法人いしかわ生物多様性ネットワーク 石川県

能登半島地震をきっかけに石川県内の自然環境の調査と保全・再生、環境教育、人材のネットワーク強化を目的として発足した NPO。石川県内の既存の生物分布情報を収集し「生きもの版住民台帳(生物分布データベース)」としてウェブで公開予定。自然再生や環境教育、市民協働型の生物調査プロジェクトでの活用を目指す。



「能登の里山里海のいま」を学ぶ自然観察バスツアー

2025年度の助成先 13 件をご紹介します。

■ 緑とふれあいの活動助成

野尻湖畔における二つの“絶滅危惧種”ニホンウナギと子どもたちの共演

森里海を結ぶフォーラム 長野県

森里海をつむぎ直すことの今日的意義を共有し、意見交換ができる場を設けることを目的とする。野尻湖でウナギを育むシンポジウムや、ウナギ稚魚の放流とその後の調査を行う観察会を開催することで、命を育む水辺や絶滅危惧種への関心と主体的な活動への気運を高めることを目指す。



第3回野尻湖水辺の生き物観察会。50名を超える親子たちが参加し、ウナギを捕獲して調査する「石倉カゴ」づくりを楽しんだ

■ 緑とふれあいの活動助成

原発被災地における里山を活かしたコミュニティ拠点「希来の杜」の整備・環境プログラム作り

小高はなみちプロジェクトチーム 福島県

東日本大震災の原発事故により避難を余儀なくされた南相馬市小高区で、復興まちづくりのサポートを行っている。里山の空き家の再生、休耕田のビオトープへの転換、雑木林でのプレーパーク造成を進めて、再生した空き家での調理体験やビオトープでの生きもの観察会を開催し、小高の食や自然を体感できる拠点として育んで行く。



夜の生きもの観察会

■ 緑とふれあいの活動助成

生きものクエスト ちいき大冒険 ~大好きを見つけ、自慢しよう~

NPO 法人子ども環境ネットワーク 京都府

京都府宇治市で環境教育と地域の環境保全に取り組んでおり、アプリを使った生きもの探しや生きものカード・生きものデジタルゲーム作りなどのプログラムを子ども主体で行っている。釧路と平塚の団体とも交流することで、地域の環境について貴重さや保全の方向性を子どもたち自身で考え行動できるようにすることを目指している。



バーチャル地域探検学習会

■ 緑の保全と活用の研究助成

南西諸島における絶滅危惧種オオセッカと湿性草原棲鳥類の越冬状況の把握

高橋雅雄 (岩手県立博物館) 岩手県

湿性草原棲鳥類で国内希少種のオオセッカは、東北地方北部と関東地方北部で繁殖し、東北地方南部から奄美大島までの各地で越冬することが確認されている。奄美大島以南の越冬状況を調査により本種の日本全国の越冬地を解明するとともに、奄美大島で越冬個体を捕獲標識して繁殖地のつながりを推定することで、保全上重要な草原を評価する。



越冬オオセッカの生息確認調査の様子

■ 緑の保全と活用の研究助成

世界自然遺産地域における両生類のロードキル：オーバーユースによる影響を探る

浅利裕伸 (帯広畜産大学) 北海道

奄美大島に生息する両生類 11 種のうち、10 種が自動車との事故(ロードキル)に遭っている。世界自然遺産への登録後、観光客の増加に伴い交通量も増加し、ロードキルの増加が懸念されることから、両生類の活動時間である夜間の交通量を調査し、ロードキル数との関係性を明確に示すことで、適切な対策を提案し、地域生態系の保全に貢献する。



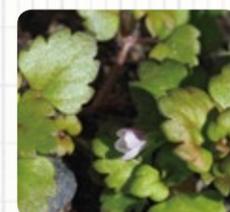
両生類のロードキル地点における調査風景

■ 緑の保全と活用の研究助成

高知海岸におけるイヌノフグリの分布と共存メカニズムの解明

鈴木紀之 (三重大学生物資源学部) 三重県

かつては日本各地で普通種だったイヌノフグリは、外来種のオオイヌノフグリの侵入により減少し、環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。近年、両種が高知県の砂浜海岸沿いに広範囲に生育していることが分かったことから、両種の分布状況および共存の生態的要因を解析し、イヌノフグリの生存戦略と保全の成功条件について明らかにする。



ひっそりと咲く高知海岸のイヌノフグリ

■ 緑の保全と活用の研究助成

クロサンショウウオ *Hynobius nigrescens* における遺伝的集団と地域個体群の保全に向けた研究

水野拓登 (京都大学大学院人間・環境学研究所) 京都府

東北~北陸地方の山地に生息するクロサンショウウオについて、2つの遺伝集団が知られているが、集団間の地理的境界は明確になっていないことから、境界に当たる北陸と中部の2か所の集団において核DNAのSNPs解析を行い、種内の遺伝的多様性と遺伝的集団構造を解明して、保全上重要な個体群を抽出する。



研究室での解析の様子

緑とふれあいの活動助成



斜里町知床峠での歩行調査

2024年10月5日に開通した「北海道東トレイル」は、釧路から羅臼、足寄まで続く約410キロメートルのロングトレイル（歩く旅の道）であり、環境省、北海道、14市町村、関係する国の機関、沿線のビジターセンター等が連携して運営している。ルートは、それぞれ特徴の異なる豊かな自然環境を有する釧路湿原、阿寒摩周、知床の3つの国立公園や、その周辺のまちを通り、歩く旅を通じて自然や地域の暮らし（酪農、畑作、漁業）を体感することができる。

本調査・研究では、歩行データを収集し、その情報を発信することで、身近な自然とのふれあいを促進し、本トレイルが環境保全や環境教育の意識を育む場となることを目的とした。調査は全線を歩き、バス停や駅、水場、トイレ、キャンプ場までの距離、標高、地点間の距離など、旅の計画を立てるために必要なデータを収集した。収集したデータは、データブックとして取りまとめ、ハイカー（トレイルを歩く人）に利用されている。また、



制作したデータブック

新しい情報（ルート、ヒグマなど動植物への注意、地域への配慮、気候など）をまとめたWebサイトを制作し、現地情報を発信している。本トレイルが、環境への気づきを与え地域住民との交流が生まれる場として、多くの人々に活用されるよう引き続き取り組んでいきたい。

緑とふれあいの活動助成



風通しを良くするために選定した枝で幼虫の寝床を作る。整備で出た枝葉は全て環境づくりに使える

ドングリランドの里山林の生物相回復による人材育成とフィールドミュージアム化

湊千恵（特定非営利活動法人どんぐりネットワーク）香川県

香川県立森林公園ドングリランドは県民参加の森づくり拠点として位置づけられており、当会が22年にわたり地域の森林団体や多くのボランティアと共に里山林の維持管理に関わってきました。しかし、他都道府県と比較して里山林本来の管理手法を地域で学び実践する機会は少なく、里山林の景観の悪化や生物多様性の減少、さらには高齢化にともなうボランティアの減少が問題となっています。

そこで私たちは里山本来の景観・生態系と生物多様性の回復を目指し、管理方法の理念と技術の学びを実施し、その効果を長期的に評価していく活動を2023年より開始しました。植物本来の生育形態や大気・土壌と水や空気の流れの回復に着目した管理方法を学べる講師をお呼びして毎月1回整備講座を実施し、その効果を大学と連携してエビデンスの取得に取り組みました。現在3年目の活動となり32回の講座と大学の土壌や植物調査を継続して行ってきました。その結果ササ藪の高さや広がり



シダ植物で被われやすくなりました。また職員や公園利用者間で公園内の環境変化に関心を持つ人が増えました。これからも継続して管理・評価をしていくことで自然と人との共生を提供できるフィールドミュージアムを目指していきます。

緑とふれあいの活動助成



鹿防護柵の更新作業

アポイ岳の花を次世代へ！ アポイドリームプロジェクト 田村裕之（アポイ岳ファンクラブ）北海道

アポイ岳は、北海道様似町にある標高810メートルほどの山ですが、世界でここにしかない花々があり、その群落が国の特別天然記念物に指定されています。当会の先輩方のお話では、「昔は一面に花が咲いていた」とのことですが、私が活動を始めた15年前ほどには、既にそのような光景はありませんでした。そこでアポイ岳の花を再生するため、2011年から『アポイドリームプロジェクト』として、地元中学生と共に学校内での高山植物育苗実験、そしてアポイ岳五合目付近に設置した「再生実験

地」での移植実験を続けてきました。この再生実験地周辺は、エゾシカの食害が多く、鹿防護柵で移植した苗を守らなくてはなりません。今回の助成により、経年劣化で破損していた柵を更新することができました。再生実験地では、移植した苗が花を咲かせて、増えている種類もあります。この花々を多くの人に見ていただくために、『見字できる実験施設』として整備予定ですが、時間をかけた作業が必要となります。しかし、アポイの花を次の世代も見られるよう、会員ばかりでなく周辺地域の方々



苗を再生実験地に移植する

2024年度の助成先をご紹介します。

2024年度のFGF助成先は、活動助成が7件、研究助成が4件の計11件でした。助成から1年間の活動・研究の成果をご報告していただきました。



お力も借りる工夫をしながら、一歩一歩実現に向けて進んでいきたいと思えます。アポイの花々が再生した姿を夢見て…。

緑とふれあいの活動助成



児童によるアマモ苗の植え付け

カツオやメカジキなどの水揚げで賑わう気仙沼港。大島の周辺には牡蠣やワカメなどの養殖筏が並び、多くの観光客が訪れます。東日本大震災からの復興が進みましたが、津波と防潮堤工事によって子どもたちが身近な海に近づけなかった期間は長く、コロナ禍以降は体験活動も低調なままです。

そこで私たちは、海や川の自然を素材にした学習や体験活動をサポートしています。今年度は、大島・田中浜を「体験学習フィールド」として捉え直し、その魅力と活用方法を



海浜植物研修会

探ってきました。まず、海洋プラごみ調査に加えてビーチコーミングを採り入れると、貝殻や気になる漂着物に視野が広がり、浜に足を運ぶ回数も増えました。また、砂浜の奥には津波や防潮堤工事で姿を消した海浜植物が再生していました。津波への適応や侵入する帰化植物を学ぶことで、フィールドを多面的に捉えることができました。さらに、浜調査で確認したアマモから種子を採集し、近隣の大島小学校と共同で水槽育苗や植え付けに挑戦しました。多様な生物が棲息する藻

緑とふれあいの活動助成



一輪の花が開き、みんなの笑顔が広がった

花さき保育園は、国立療養所多磨全生園の自然を生かした保育に取り組んでいます。全生園は「人権の森」と呼ばれ、豊かな自然と歴史を併せ持ち、子どもたちが自然とふれあいながら「生きる力」を育む場です。令和7年7月24日、助成金で作成した冊子『多磨全生園の森を楽しむ（夏の植物編）』に掲載しているアレチマツヨイグサの開花を取り上げた「夏の夜の観察会」を富田広先生のご指導の下、園に隣接する「ふれあい広場」で開催しました。

花の瞬間を息をのんで見守りました。やがて待ち望んだ一輪の花がすっと開き、感嘆の音が響きます。ふと周囲を見渡すと、あちこちに黄色の花が咲き出しているのに気付きました。暗闇の中、次々と花が開く様子を確かめながら、子どもも大人も自然の営みの奥深さを共有しました。2年目の開催となり、子どもたちの自然への関心と保護者の理解が深まる機会となりました。保育園は自然観察や食育、造形活動など多様な切り口で保育を展開しています。観察会はその延長線上にあり、子ども

主体の学びを家庭や地域へ広げていきます。今後も取組を継続し、観察会を恒例行事として定着させたいと考えています。参加者からも「来年も集まりたい」との声が寄せられ、活動の継続性と広がりへの期待が高まっています。成果を地域に還元し、自然環境保護の意識を育む活動をとしてさらに発展させていきます。



暗闇にすっと開くアレチマツヨイグサ

緑とふれあいの活動助成



森の中に生えてくる竹を切り出して、竹灯籠に挑戦

川崎市の南野川ふれあいの森（南野川特別緑地保全地区）は、約1ヘクタールの雑木林です。21年前、薄暗い藪のようなこの森を見て、自分たちでできることはやろうと「はぐくむ・あそぶ・もりで」をコンセプトに「野川はあも」を立ち上げました。毎月2回の活動日には、下草刈りや落ち葉かきなどの作業の前に観察の時間を設け、森を体感し、作業だけではない遊びも含めた活動を続けてきました。当初のメンバーに子育て世代が複数いたことで、必然的

に子どもも一緒に活動となり、親子連れの参加者も増えていきました。しかし近年、活動への参加だけでなく、森で遊ぶ子どもの姿も減っていると感じ、子どもの遊び場としての森を提案することで、地域にある日常の森を知ってもらい、活動への参加につなげようと「森と遊びと子育て」と題したシンポジウムを開催しました。専門の先生による子どもとの発達と遊びの関係についての講演、そして地域の冒険遊び場主催者と自主保育経験者、私たちのメンバーの大学

生を交えての討議という内容は、とても好評でした。また、年4回「森で遊ぶ日」を開催しました。初めて森に来た親子も多く、竹切りや木登り、落ち葉プールなど、どの回も森ならではの遊びを楽しんでくれました。これらのイベント報告も兼ね、20周年記念の小冊子を作成しました。保育施設を中心に配布し、地域にある日常の森を知ってもらい、そこを守り育てる活動への参加の契機となるよう活用していきます。



森では大人とおしゃべりもはずむ

緑とふれあいの活動助成



竹を活用したさまざまな体験活動を提供している

山口県長門市・俄山地区で20年以上続いてきた竹林保全活動「竹林ボランティア俄山（竹ボラ）」は、放置竹林を整備し、竹のある暮らしや文化を未来につなぐことで、豊かな環境と景観を守ることを目指しています。荒廃が進んだ竹林や杉林は里山の景観や生態系にも影響が出ています。竹ボラはこうした課題に有志のメンバーが向き合い、荒れた山に手を入れ直すところから活動を積み重ねてきました。

活動内容は、竹林整備、たけのこ掘り体験、竹材の利活用研究、子ども向け自然体験学習など多岐にわたります。今年度は「メンマ」や「竹炭チップ」づくりにも取り組み、竹を資源として循環させる動きが始まりました。整備が進んだ竹林には光が入り、地域住民や移住者、高校・大学生らが野外体験学習を行う場としても活用し始めました。

開始当初50〜60代だったメンバーも、今では後期高齢者となりました。現在は次世代である私たちへとバトンが渡され、新たなフェーズを迎えています。これまで培われてきた知識や技術を受け継ぎつつ、団体として持続可能であるために「知恵と経験・人・資金」が循環する仕組みづくりが次年度の大きなテーマだと感じています。加工品づくりや体験プログラムの強化、地域内外との協働を通じ、多様な関わり方を生み出していきたくと考えています。



竹林整備の様子

子どもたちと繋ぐ里山・多世代世代参加型竹林で遊び学び守る体験学習の場作り

石田香織（竹林ボランティア俄山） 山口県

緑の保全と活用の研究助成



秋の戦場ヶ原。遊歩道は野生動物にも利用され、種子を内包した糞が排泄される

野生哺乳類の移動ルートの変化は、実を食べて種子を運ぶ「種子散布者」としての役割を担うため、道路による野生哺乳類の移動ルートの変化は、

植物の種子の散布場所や発芽後の芽生えの成長に影響する可能性があります。そこで本研究では、遊歩道が野生哺乳類の移動ルートの変化を介して、植物の種子散布に与える影響を調べました。遊歩道沿いと林内にそれぞれ調査ルートを設置し、種子を含む糞を数えたところ、遊歩道沿いでは2週間約200個の糞を採集することができた一方で、林内ではほとんど糞が見つかりませんでした。初夏には芽生えの数をそれぞれのルートで調べましたが、やはり遊歩道沿



遊歩道沿いで発芽したズミの芽生え(矢印部分)。遊歩道沿いでは多くの芽生えが観察できるが、林内では少ない

緑の保全と活用の研究助成



冬枯れしたススキに作られたカヤネズミの球状巣

カヤネズミは出産・哺育や休息の場として、主にイネ科植物の茎や葉を利用して、球状の巣(球状巣)を作ります。三重県ではこれまでの調査で一年を通して球状巣が確認されていますが、幼獣の確認例はきわめて少なく、巢内で死亡している個体を除くと6~12月に限られています。本種は出産・哺育目的に限らず、一時的な休息のためにも営巣を行うため、球状巣の確認だけでは繁殖期の特定はできません。そこで、繁殖スケジュールを明らかにするため、2エリア9区の定期調査区と4エリア

6区の不定期調査区を設定し、原則として月2回踏査して、球状巣の発見と巢内の幼獣の探索を行いました。その結果、営巣は一年を通して確認され、過去の文献記録を含めると1月を除く各月で、出産・哺育を含む繁殖行動が確認でき、三重県中部において通年繁殖を行っていることがわかりました。当初予定していた小学生との公開調査は、今夏の猛暑により熱中症予防の観点から実施することができませんでした。今回の調査結果をもとに、カヤネズミの生態について紹介



冬季の調査風景

する展示や学習キットの作成を行い、水田や麦畑という人の営みがある身近な場所が、カヤネズミを含む多様な生物にとって大切な環境であることを知ってもらう機会を提供していきます。また、カヤネズミの保護を目的とした草地管理のあり方についても考え、発信していく予定です。

緑の保全と活用の研究助成



ラインセンサスの様子

トウキョウダルマガエルは、生活史のほとんどを水田及びその周辺の畦畔で過ごす。圃場整備事業等による水田及びその周辺の構造的変化、水田耕作の変化などといった、圃場内の環境の変化を受けることが危惧されている。さらに、近年大規模経営体の増加や農政の変化により、栽培品種(食用米や新規需要米)が多様化している。それに伴い、取水開始時期と湛水時期が変化しており、こうした変化は水田で生活をするトウキョウダルマガエルに影響を与え

る可能性がある。そこで、本研究では、録音音声によるトウキョウダルマガエルの生息状況の評価と圃場内の水位の変化の記録より、水田の湛水時期とトウキョウダルマガエルの生息状況の関係について明らかにすることを目的とした。2025年4月15日からこれまでに、栃木県宇都宮市下ヶ橋の栽培品種と湛水時期の異なる20圃場において、①録音音声による生息状況の評価：毎日2:00~2:30の30分間のICレコーダーによるトウキョウダル



農作業の邪魔にならないよう支柱に取り付けた機材

マガエルの広告音の録音、②圃場の水位の記録：トレイルカメラを用いて水位を記録、③現地調査：5日1回、対象とした20圃場において、鳴き声の聞き取りやラインセンサスによる幼生・上陸した幼体の個体数について調査を行った。今後は、①録音音声の評価について、複数個体が鳴き交わしている時間に注目しながら、引き続き調査とデータの分析を継続する。

緑の保全と活用の研究助成



池干し後3年目のため池

水田環境に生息する水生動植物は、生息環境の悪化やコイ等の外来生物による捕食圧により減少傾向にあります。コイを根絶できるため、「池干し」は水生動植物の多様性に正の効果をもたらすと思われ、大きな攪乱を伴うため、負の効果も懸念されます。本研究では、池干しによるコイの駆除が水生動植物の多様性に与える影響を3年かけて評価することを目的としました。兵庫県西部のため池を2022年11月に干し上げ、コイを駆除しまし

た。比較対象として、近隣のコイ未侵入池3か所も調査地としました。各調査地において、2022年11月(駆除前)および2023~2025年の4~12月の期間、水生動物群集を毎月調査し、水生植物の出現種も記録しました。侵入池における水生昆虫類の出現種は、駆除前は6種でしたが、駆除翌年からはタガメやクロゲンゴロウなどの繁殖も確認され、駆除3年後には累積38種まで増加しました。一方、水生植物は未だ3種のみです。駆除



池干し後3年目にみられたタガメの卵塊

前には水生植物を利用する種や泥に潜る種は侵入池よりも未侵入池の方が多かったですが、その差は経時的に小さくなりました。一方、水面や水中を漂う種は調査期間を通して、侵入池と未侵入池で個体数に差がない、もしくは侵入池の方が多かった。したがって、特に水生植物を利用する種や水底に潜る種がコイの影響を受けやすいことが示唆されました。今後も調査を継続するとともに、池干しの方法や生物多様性保全効果に関するマニキュアルを作成予定です。



FGF助成一覧

243 件のFGF助成先をご紹介します。

※ 団体名・所属名等は助成当時のものです。

● 1984 年度

- 1 オオムラサキの森づくり
- 2 自然を守り生かす青少年の森づくり
- 3 社寺林の保全・管理に関する法学的研究
- 4 リスのいる森づくり

● 1985 年度

- 5 子供たちのフォレスト・ファーマーシング
- 6 屋敷林の保全と活用
- 7 明神地域の保全・活用に関する生態的研究
- 8 知床の大型野生動物の生態と自然教育への活用に関する研究

● 1986 年度

- 9 自然と芸術の森づくり
- 10 ドングリー粒運動による広葉樹林の育成
- 11 歴史的居住環境の保全と利活用に関する研究
- 12 伝統的な里山環境の生態学的研究

● 1987 年度

- 13 ギフチョウが舞いサギ草の咲き乱れるコウヤマキの森づくり
- 14 自然史博物館「嵐山自然と文化の森」の保全と活用
- 15 自然の宝庫・桶ヶ谷沼を生かしたまちづくり
- 16 飛騨山脈の自然生態調査と一般登山活動での自然学習のあり方
- 17 緑と人間の親和性を高める環境絵本づくり

● 1988 年度

- 18 「いろいろの里」生活原体験及び自然観察会
- 19 雑木山から生活文化を問い直す
- 20 野外博物館「山の子村」の保全と活用
- 21 「市民による雑木林の保全・管理」のテキストづくり
- 22 神社の社叢における神樹の調査研究

● 1989 年度

- 23 寒風山「風雪の森」づくり
- 24 花いっぱい鳥いっばいの森づくり
- 25 荒廃したサンゴ礁を復元するサンゴ移植活動
- 26 トロッコ道に見る霧島連山百年の変遷について
- 27 裏磐梯湖沼の生態と自然保護教育への活用に関する研究

● 1990 年度

- 28 「望ヶ原天然林」を生かした自然に親しむ活動
- 29 見沼カムバックふるさとプラン
- 30 「帯広の森」野生動物とのふれあいの場づくり
- 31 イトウのすめる森づくり
- 32 ホタルの生息する人里の水系環境保全と人間活動の調和

● 1991 年度

- 33 奥球磨山地に「人間の森」をつくる
- 34 ネイチャートレイルの設置活動から村の自然のサンクチュアリー化運動へ
- 35 谷津干潟保全対策の研究
- 36 糸島地方の自然説明とその保護及び一般への啓蒙

● 1992 年度

- 37 農山村エコミュージアムづくりによる都市・農山村の交流
- 38 紀伊半島沿岸におけるウミガメの調査及び保護活動
- 39 御前・釈迦岳ブナ・シジミ林の自然とその保全について
- 40 湧水に生息する生物の生態研究

● 1993 年度

- 41 森は海の恋人
- 42 森・人・生きもの・地球を緑の輪で結ぶ京都大原野の体験森づくり
- 43 坪井川遊水池における生態系の復元
- 44 十津川村地方における伝統的養蜂の調査研究
- 45 宮古諸島におけるサシバと緑と人間の親和性を高めるための基礎研究

● 1994 年度

- 46 ジュンサイ再生保全活動による緑と生きものの復元
- 47 子供達と水生生物との共生をめざす湿地「たんぼ水族館」の保全と利用に関する研究
- 48 あなたにも出来る保全生物学「市民による絶滅危惧植物の保全研究のマニュアルづくり」

● 1995 年度

- 49 筑波山に炭焼きの里づくり
- 50 コアジサシの生態調査及び保護運動と水辺環境の復元
- 51 生活光とホタルの共存について
- 52 オオサンショウウオの生息状況調査

● 1996 年度

- 53 市民参加型緑地保全活動の実践及び推進
- 54 「新タンボボ地団」の作成とその環境教育への応用
- 55 高知県宇佐竜蟹ヶ池における水湿植物の保全に関する生態学的研究
- 56 学校緑地にビオトープを導入するための基礎的研究

● 1997 年度

- 57 里道の修復による赤目の里山の保全
- 58 手作り湿地や水辺の復元運動
- 59 多摩ニュータウン 19 住区の農業公園化構想
- 60 岡山県内の水草の種類と分布、その環境に関する研究およびミズアオイの保護活動

● 1998 年度

- 61 「体験の森づくり」活動
- 62 草原・里山の維持管理技術の啓発と実践による半自然植生の保全
- 63 森林活動による精神発達障害者の療育効果に関する研究
- 64 小動物の利用環境として都市残存林を評価する手法の研究と生態ガイドブックの作成

● 1999 年度

- 65 農業体験教室「草の根農業小学校」の運営
- 66 絶滅危惧植物ガシャマの保全生物学的研究
- 67 ニホンザリガエの分布・生息環境とその保全に関する研究

● 2000 年度

- 68 野尻湖における水草帯の復元と環境教育
- 69 スノーケリングによる藻場・海中林及びアマモ場を主体とした海中自然観察会
- 70 豊かな里山を次世代に残すために

● 2001 年度

- 71 大町ランドワークによる上原ビオトープ創出事業
- 72 えひめあやめ指定地その周辺里山整備計画
- 73 市街地緑地の種の保存と供給機能の研究

● 2002 年度

- 74 有明海および島原湾の底生生物データベース作成
- 75 多摩川中流域河床の「地層の野外観察」用の観察路と支援システムの構築

● 2003 年度

- 76 林業スクール
- 77 「やまばんの森」の「春の女神」保護活動
- 78 東京都府中市立南白糸台小学校「水色の学校プロジェクト」
- 79 沖繩県、慶良間諸島にみられる貴重な森林生態系の持続的保全と活用

● 2004 年度

- 80 子供達とヤマメの巣箱製作、設置、生態と生息する森林生態系の観察と記録
- 81 霧多布湿原ファンづくりのための木道修復活動
- 82 金沢市とその近郊の農業用水の生物多様性維持機能を高めるための基礎的研究
- 83 桂川・相模川水系におけるシジミ類の生息調査及び在来種マシジミの保存に向けた繁殖実験

● 2005 年度

- 84 研究者と市民の協働による里山の生物多様性保全のための活動及び調査
- 85 田舎暮らしグラウンドワーク・ウスイロヒョウモンモドキの森ノ島高原自然再生事業
- 86 瀬戸内海の干潟における貝類を中心とした環境指標生物の探索
- 87 環境教育機能を備えた小学校林の生態管理システムの構築

● 2006 年度

- 88 小網代の森保全推進のためのパトロール活動
- 89 里山と共に育つ学校の森づくり―里山が育つ、里山と育つ、里山から育つ―
- 90 名古屋周辺における外来カメ類の現状調査と在来カメ類の保護・保全活動
- 91 水田におけるゲンゴロウ幼虫の保全に関する野外調査研究

● 2007 年度

- 92 赤とんぼ全国調査
- 93 ニッポンバラタナゴを救う伝統的農業水管理法「ドビ流し」の効果
- 94 日本におけるカキ産生態系の研究と保全
- 95 都市的環境で在来種が外来種に駆逐される要因の解明

● 2008 年度

- 96 公園管理と営の養殖
- 97 湖北野田沼内湖の再生で動き出す琵琶湖のいのちプロジェクト
- 98 身近な地域・自然を学ぶ環境学習の教材化とプログラムの構築
- 99 ヒサカキの種子散布にかかわる生物間相互作用が三宅島の森林生態系回復に果たす役割
- 100 筑後川の支川・小石原川におけるアカザの生態
- 101 重たテ原・坊ガツル湿原における火入れによる土壌環境変化の実態とその効果の検証
- 102 休耕田を利用した湿生植物群落の回復

● 2009 年度

- 103 遊んで学ぶ里山体験
- 104 栗山鳥の下自然公園・ムクロジの里ステップアップ事業
- 105 カンキョウカジカの生態研究とその保護対策について
- 106 奄美大島湯湾岳の野生絶滅植物リュウキュウアセビの復元に向けた遺伝解析
- 107 秋吉台の絶滅危惧植物の保護に向けたゾーニングのための基礎研究
- 108 中央アルプス山麓の里山に生息する絶滅危惧種ヤマシジミとヒメシジミの保全に関する研究
- 109 京都・平安神宮内の池に生息するイチモンジタナゴの保護

● 2010 年度

- 110 参加型フットパス・ツーリズムの振興による棚田・里山環境の保全とその活用
- 111 生駒市西畑地区の棚田・里山の再生と創造
- 112 スナメリから見つめる瀬戸内海
- 113 福岡市見良川におけるシロウオの産卵環境の解明と住民参加型の保全活動について
- 114 琵琶湖固有亜種とされるピワマスにおける遺伝的多様性の変化
- 115 昆虫類を指標とした都市近郊の里山の生物多様性評価手法に関する研究

● 2011 年度

- 116 高校生・若者による埼玉県小川町での里山づくりと環境教育活動
- 117 MY大嵐山方式(会員ボランティア)による大嵐山の自然環境保全運動の仕組みづくり
- 118 牛耕復活による里山のたすけ再生
- 119 「干潟生物の市民調査」手法による八代海のベントス相調査
- 120 東北太平洋沖地震津波による蒲生干潟周辺域の被害現況調査と海浜性生物の再定着プロセスの解明

● 2012 年度

- 121 大人も子どもも谷で楽しく自然体験
- 122 伝統的循環型農業の復活と自然素材を活かした古民家再生によるツシヤママネコと共生する村づくり
- 123 多摩川における外来魚調査及び外来種問題啓発活動
- 124 ラムサール条約登録湿地・伊豆沼・内沼の食物網における放射性物質の濃縮の評価
- 125 大分県指定天然記念物カマエカズラの繁殖生態と保全に関する研究
- 126 野生鳥獣の放射能汚染が狩猟者の捕獲活動に与える影響

● 2013 年度

- 127 3次元GISモデルを用いた八王子滝山里山保全地域の環境モニタリング活動
- 128 日本に留学している大学生の中山間地域における日本文化体験プログラム
- 129 来浜者の踏圧がウミガメのふ化に及ぼす影響についての調査
- 130 「家族で学ぼう福島環境教育エコツアー」開催事業
- 131 石川県沿岸に生息する絶滅危惧種イカリモンハンミョウの生態解明と保全対策の検討
- 132 北海道平野部における野生生物による防風林の利用状況に関する研究
- 133 身近な自然体験の教育的効果の検証 ～多摩市内の里山環境を生かした教育実践の総合的調査～
- 134 「震災後の増田川」から持続可能な地域社会へのアプローチ

● 2014 年度

- 135 小笠原諸島、西島の森林再生
- 136 愛子子どもの森の保全とふれあい活動
- 137 ロープ漁礁とアマモによる生態系の創出活動
- 138 鹿児島県出水市における保護ツルの臨床検査
- 139 琉球列島中部域における進毒サンゴの新規加入幼生の種多様性と遺伝学的集団構造に関する研究
- 140 奄美諸島における希少野生植物の繁殖に関する生物相の基礎的研究
- 141 東日本大震災の津波被災地における地域農業資源の保全に関する実証研究

● 2015 年度

- 142 『多摩川のケヤキと共生する会』青梅市多摩川流域のケヤキの食害性害虫からの救済と緑陰の維持
- 143 「松代おやっこ村」魅力アッププラン
- 144 奈良県レッドデータブックに記載されている自生山野草の保全と管理
- 145 野焼きボランティアのための難燃性ゼッケン製作
- 146 市民調査による岩手県植物相の研究
- 147 希少動物アマミノクロウサギ保全に向けた分子遺伝学的アプローチ
- 148 対馬に生息する希少植物種を保全するための植生回復および栽培試験に関する調査研究
- 149 サクラにおける効率的な挿し木繁殖法の確立およびサクラ遺伝資源の保存・管理に関する基礎研究

● 2016 年度

- 150 京都府立須知高等学校の「ウィードの森」の生態調査と里山の整備
- 151 名勝・重要文化的景観「おぼすて(田毎の月)」棚田の保全活動
- 152 はぐくも、つなげる、つたえる、まもる、谷津田の生きもののいのちのにぎわいとつながり
- 153 大淀川の絶滅危惧植物「タコノアシ」の保全活動
- 154 ドローンとVR技術を活用した里山ランドスケープのモニタリング手法の開発
- 155 GPS首輪を用いた積雪地域におけるイノシシの行動特性
- 156 遺伝情報を用いた絶滅危惧植物ヤチジャジンの野生集団の再生
- 157 外来アライグマの営巣特性調査と対策コスト削減のための巣箱ツノワの開発

● 2017 年度

- 158 女川学びの森の整備と利活用促進
- 159 里山を活かしたこどもの遊び場と大人のコミュニティスペース
- 160 子どもたちによる里山再生プロジェクト
- 161 豊田市の中山間地を舞台とした多世代参加型の自然とのふれあい活動
- 162 東京藝術大学上野キャンパスにおける武蔵野の植生再生と維持の活動東京藝術大学上野キャンパスにおける武蔵野の植生再生と維持の活動
- 163 ニホンイシガメの保全を目的とした生活史の解明
- 164 知床国立公園とその周辺におけるヒグマと人の共存の道を探る調査研究
- 165 石狩海岸における希少アリ類・海浜植物・外来カエル類の相互関係に関する研究

● 2018 年度

- 166 大人も子どもも楽しく安全に自然体験が楽しめるガイアの森づくり
- 167 みちのく潮風トレイル利用促進のための歩行データの調査・研究
- 168 豊北の水と生態系の研究・下関北高協同×粟野川流域図作成を原点に～
- 169 海岸の自然観察を通じてマイクロプラスチックの危険性を学ぶ
- 170 伊豆諸島青ヶ島の絶滅危惧種が生息する噴気孔原群落の保全に向けた基礎研究
- 171 天然記念物ミヤコタナゴの再導入等の候補地の探索および生息域の再生手法の検討
- 172 網走市こまば木のひろばにおけるエゾモモンガの生態調査
- 173 巨樹・名木とそれを取り巻く地域社会における生態系サービス及びEco-DRR機能の定量的評価
- 174 岩手県の砂浜植生再生活動を通した環境教育プログラムの開発

● 2019 年度

- 175 浅間山系におけるマヤマシロチョウの保全活動と生態調査
- 176 男鹿の自然にふれあい生きる力を身につけよう!多世代参加の自然体験プロジェクト
- 177 多摩丘陵に残された里山と古街道の歴史環境遺産を保護し、自然景観の維持と活用に貢献する
- 178 球磨郡相良町の湿地再生及びそれに係わる地域連携の構築
- 179 七尾湾の環境改善と環境保全型農業の実現に向けた海藻草の回収活動
- 180 天然記念物コクガンの捕獲およびGPS送信機装着事業
- 181 内部標識を用いた絶滅危惧種ギバチ(*Pseudobagrus tokiensis*)の生活史調査
- 182 広域分布型絶滅危惧植物の域外保全策確立に関する研究：ラン科カンランを例にして
- 183 自然豊かな河川と水害をもたらす河川に関する伝統知と環境・防災教育に関する実践研究

● 2020 年度

- 184 動植物とその生息環境の保全と安全登山のために
- 185 「法」の字プロジェクト～低層植物の保護・再生による都部五山送り火の山の保全、そして、送り火行事の保存継承へ～
- 186 絶滅危惧Ⅱ種「ヤマグチサンショウウオ」の棲息環境の保護・保存と小学児童の環境教育
- 187 分布北限域におけるエダミドリイシの有性生殖法を用いた養殖・移植方法の確立に向けた活動
- 188 外来種であるキノボリトカゲのテリトリーを用いた駆除技術の開発
- 189 市民科学手法を活用した外来魚アメリカナマズの侵入前線検出
- 190 西表島固有種シキタテナガエビの絶滅回避に必要な保全遺伝学的研究

● 2021 年度

- 191 愛宕山てっぺんの森の「生態系管理」[環境教育拠点化]事業
- 192 カヤネズミとヒナカマキリを含む地域の生物多様性保全プロジェクト in 竹尾緑地 2021
- 193 生物多様性保存型里山ビオトープの造成とその活用に関する事業
- 194 Lady go! 女性が中心となり、女性が育む「ガイアの森」里山再生モデル事業
- 195 やながわ有明海水族館を活用した幅広い世代への体験型環境教育の実施
- 196 ホトケドジョウ類の進化史の解明と保護施策の確立－ホトケドジョウ学の新展開－
- 197 七北田低地(仙台・多賀城)へのシジュウカラガン復元に向けた基礎研究
- 198 三宅島におけるハチジョウススキの特徴－自然と文化をつなぐ茅葺の復活をめざして－
- 199 奄美群島における漂着物学研究推進のための基礎的研究

● 2022 年度

- 200 福島県飯館村・耕作放棄地の土地活用に向けた漆の試験栽培、苗木生育のための圃場整備活動
- 201 炭素循環型農業による生きものへの保全・再生の拠点づくり
- 202 埼玉西部を流れる高麗川並びにその流域の水生生物の調査並びに川での子供たちへの環境教育
- 203 自然界と共存し、自然界を保全していく町づくり活動
- 204 淀川のワンドに生息するイタセンバラをはじめとした在来魚類の保全活動と地域に根ざした環境教育
- 205 耳石微量元素分析を用いたニホンウナギのハビタット間移動と堰との関係の解明
- 206 ニホンスッポンとチュウゴクソッポンの交雑実態の解明ならびに交雑個体の検出法の確立
- 207 淡路島におけるシロドリりの生息・営巣状況の調査および保全対策の実施と検証
- 208 広島県における空気中の環境DNAを指標とした森林野生哺乳動物の生息モニタリングとその応用に関する研究
- 209 東京都心域の都市緑地を活用したポリネーターガーデンの創出と技術的指針の検討

● 2023 年度

- 210 「森の忍者・ムササビ」観察会及び生息調査
- 211 佐賀の田舎から心を育み、生きる力を養う自然体験活動を届ける
- 212 子どもたちの日常の中に自然を取り入れるきっかけを与える事業
- 213 猪名川河川域の植物調査(絶滅危惧植物の保全・増殖および昆虫が利用する植物のフェノロジーの製作)
- 214 VRも活用した石狩川流域の湿地環境保全・利活用の普及活動
- 215 越冬環境の泥と水の深さがサダガエル幼生の越冬成功と翌春以降の成長・発生に与える影響：江やビオトープを重視した保全対策の改善に向けて
- 216 大雪山国立公園の利用者とエゾナカキサギの良好な関係の構築のための自然・社会科学的研究
- 217 山陰地方と北陸地方のミナミアカヒレタビラとヤリタナゴの分布および地域固有性の調査
- 218 利根川沿いに生息する生物は交雑によって多様化しているか？
- 219 環境保全機能と集落の自治機能を損なわない小規模集落水道の存続条件

● 2024 年度

- 220 アポイ岳の花を次世代へ!～アポイドリームプロジェクト～
- 221 ドングリランドの里山林の生物相回復による人材育成とフィールドミュージアム化
- 222 北海道東トレイル利用促進のための歩行データの調査・研究
- 223 子どもたちと繋ぐ里山・多世代参加型竹林で遊び学び守る体験学習の場作り
- 224 地域の森の存在意義を子ども遊び場、育ちの場という視点でとらえ、地域の森の保全活動につなげる
- 225 人権の森「多磨全生園」の自然とのふれあいを通して育む「生きる力」
- 226 身近な環境のよさやその変化を感じとれる「海辺の体験学習フィールド」づくり
- 227 池干しによるコイの除去は水生生物の多様性を回復させるか？
- 228 声紋調査を用いたトウキョウダルマガエル(*Rana porosa porosa*)と水稲作の農事暦及び栽培種の関係について
- 229 三重県中部におけるカヤネズミの繁殖生態調査と「田んぼの小さなネズミたち」学習キットの製作
- 230 野生哺乳類による遊歩道の利用が樹木の世代更新に与える影響

● 2025 年度

- 231 絶滅危惧種とその生息環境再生および次世代向け体験型自然科学教育事業
 - NPO 法人ビオトープ・イタンキ in 室蘭
 - 北海道
 - 65 万円

● 2026 年度

- 232 ハヶ岳南麓のフクロウ生育環境の保全
 - ハヶ岳自然クラブ・フクロウグループ
 - 山梨県
 - 95 万円

● 2027 年度

- 233 森の恵みを感じ、植樹し、水源林の効用を身近に学ぶ、子供達等へのトータル森林体験教育
 - 特定非営利活動法人百年の森づくりの会
 - 埼玉県
 - 80 万円

● 2028 年度

- 234 ふくしま浜街道トレイル利用促進のための地域資源、歩行データの調査・研究
 - 特定非営利活動法人ふくしま浜街道トレイルアソシエーション
 - 福島県
 - 100 万円

● 2029 年度

- 235 子ども森林ボランティア養成講座「もりモリボックス」
 - NPO 法人もりメイト倶楽部 Hiroshima
 - 広島県
 - 20 万円

● 2030 年度

- 236 市民連携による「生きもの版 住民台帳」のデータベース作成と市民協働型調査の展開
 - NPO 法人いしかわ生物多様性ネットワーク
 - 石川県
 - 90 万円

● 2031 年度

- 237 野尻湖畔における二つの「絶滅危惧種」ニホンウナギと子どもたちの共演
 - 森里海を結びフォーラム
 - 長野県
 - 85 万円

● 2032 年度

- 238 原発被災地における里山を活かしたコミュニティ拠点「希来の社」の整備・環境プログラム作り
 - 小高はなみちプロジェクトチーム
 - 福島県
 - 80 万円

● 2033 年度

- 239 生きものクエスト ちいき大冒険～大好きを見つけ、自慢しよう～
 - NPO 法人子ども環境ネットワーク
 - 京都府
 - 24 万円

● 2034 年度

- 240 南西諸島における絶滅危惧種オオセッカと湿性草原棲鳥類の越冬状況の把握
 - 高橋雅雄(岩手県立博物館)
 - 岩手県
 - 76 万円

● 2035 年度

- 241 世界自然遺産地域における両生類のロードキル：オーバークースによる影響を探る
 - 浅利裕伸(帯広畜産大学)
 - 北海道
 - 50 万円

● 2036 年度

- 242 高知海岸におけるイヌノフグリ分布と共存メカニズムの解明
 - 鈴木紀之(三重大学生物資源学部)
 - 三重県
 - 70 万円

● 2037 年度

- 243 クロサンショウウオ(*Hynobius nigrescens*)における遺伝的集団と地域個体群の保全に向けた研究
 - 水野拓登(京都大学大学院人間・環境学研究科)
 - 京都府
 - 65 万円